

第49表 出土石器一覧表(3)

種別 番号	番号	器種	出土区・層	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	
177	1184	砥石	7.5	III	凝灰岩	5.45	1.95	1.05	16.57	671
	1185	砥石	7.5	II b	凝灰岩	4.60	3.20	1.03	22.62	74
	1186	砥石	5	表	凝灰岩	5.30	3.55	1.00	22.13	
	1187	砥石	9.5	III	砂岩	4.30	2.75	2.30	24.90	1414
	1188	砥石	14T	III	砂岩	7.10	2.65	1.75	50.79	359
	1189	穴あき砥石	6.5	III	砂岩(天草砾)	4.30	3.15	3.30	53.40	1172
	1190	穴あき砥石	6.5	III	砂岩	5.10	4.70	1.35	33.80	1970
	1191	砥石	7.5	III	砂岩	5.45	4.50	1.50	64.81	6082
	1192	砥石	10	III	砂岩	4.90	3.35	1.75	29.98	5046
	1193	砥石	14	II	砂岩(天草砾)	6.45	4.20	2.60	84.36	
	1194	砥石	9	III	砂岩(天草砾)	6.05	3.30	2.90	69.71	5682
	1195	砥石	7.5	III	砂岩	805.00	3.45	2.70	108.78	309
	1196	砥石	7	Pg	砂岩	10.00	6.90	4.10	280.86	3429
	1197	砥石	7.5	III	凝灰岩	11.00	5.20	4.75	258.77	2733
	1198	砥石	12	III	砂岩	8.60	6.25	5.15	288.47	509
	1199	砥石	2	III	砂岩	12.90	5.40	4.25	299.70	52
	1200	砥石	12	P	砂岩	9.20	4.75	3.55	281.65	991
	1201	砥石	9	III	砂岩(天草砾)	5.40	5.95	3.85	180.97	632
	1202	砥石	9.5	II b	砂岩(天草砾)	6.60	5.10	4.25	209.57	550
	1203	砥石	7.5	III	砂岩	7.80	6.40	1.85	121.59	626
	1204	砥石	10	III	砂岩	7.35	4.65	3.00	192.36	1906
	1205	砥石	6.5	II b	砂岩	18.85	5.20	4.00	547.50	517
178	1206	砥石	5	マザリ	砂岩	12.90	14.35	4.20	940.00	1422
	1207	砥石	7.5	III	砂岩	10.55	8.65	2.65	400.00	2787
	1208	砥石	5		砂岩	8.70	6.00	2.20	187.48	1422
	1209	砥石	7	III	砂岩	11.50	8.85	3.30	500.00	1191
	1210	砥石	12	P	砂岩	17.75	12.60	4.60	131.00	967
	1211	砥石	7.5	III	砂岩	11.35	8.30	1.65	211.44	2676
	1212	砥石	5	IV	砂岩	9.40	6.85	1.05	92.51	720
	1213	砥石	7	IV	砂岩	17.75	10.55	0.85	280.09	3521・3409
	1214	砥石	10	III	砂岩	7.00	9.05	1.50	112.03	6200
	1215	砥石	9.5	H13	砂岩	9.70	6.25	1.95	162.60	4138
	1216	砥石	9.5	H6	砂岩	10.65	10.50	3.35	632.50	2188
	1217	砥石	15	ピット	砂岩	9.80	10.20	1.80	289.42	1460
	1218	砥石	9.5	III	頁岩	6.85	4.20	1.65	69.08	1171
	1219	砥石	6	V	砂岩	6.20	6.70	0.70	44.86	1750
	1220	砥石	5	III	砂岩	5.45	6.70	1.15	81.69	1198
	1221	砥石	9	III	砂岩	3.70	6.70	0.95	31.65	4793
	1222	砥石	7.5	H34	頁岩	3.95	7.05	0.85	26.97	3980
	1223	砥石	15		安山岩	5.30	3.25	0.90	16.06	1135
179	1224	研磨がある製品		表	粘板岩	5.60	3.00	0.40	7.78	
	1225	研磨がある製品		表	粘板岩	3.60	3.60	0.5	8.11	
	1226	手持砥石	10		安山岩	5.40	2.50	2.10	42.76	2284
	1227	手持砥石	6.5	III	頁岩	9.95	2.35	1.95	84.06	2516
	1228	手持砥石	9	III	砂岩	4.00	3.45	2.95	49.39	1901
	1229	加工のある砥石	8	IV	砂岩	6.05	3.95	2.20	54.51	5641
	1230	加工のある砥石	6T	III	砂岩	10.60	5.15	2.45	227.91	419
	1231	研磨加工製品	8		凝灰岩	10.25	2.60	1.05	28.59	2986
	1232	研磨製品	3	III	凝灰岩	10.60	3.05	0.65	24.99	660
	1233	石斧未製品	6	II b	頁岩	16.60	4.40	3.20	25.00	444
	1234	バカ刃未製品	5	IV	砂岩	14.15	9.50	2.15	447.50	772
	1235	砥石状製品	8	III	砂岩	5.90	3.35	1.15	44.37	4815
	1236	砥石状製品	9	III	砂岩	6.65	3.05	1.85	67.88	1521
	1237	砥石状製品	6.5	III	安山岩	8.00	6.35	1.60	143.35	2650
	1238	石製円板	9.5	II b	砂岩	6.25	5.65	1.20	74.57	447
	1239	軽石製品			軽石	18.45	13.85	8.50	400.00	
	1240	軽石製品	9.5	H7	軽石	3.45	2.40	1.55	3.27	4101
	1241	軽石製品	10	H20	軽石	4.50	3.75	2.55	12.24	7176
	1242	軽石製品	8	III	軽石	3.45	3.15	1.30	3.63	4880
	1243	石帶(丸輪)	8	III	黑色頁岩	2.85	2.50	0.80	7.03	147
	1244	石帶(丸輪)			蛇紋岩	3.20	2.80	0.50		
	1245	玉	10	III	ヒスイ	2.50	1.80	0.80	6.28	
	1246	玉	8	IV	ヒスイ	1.60	1.45	0.70	4.20	6005
	1247	丸玉	8	III	緑色凝灰岩	1.50	1.45	1.25	4.04	3592
	1248	ガラス玉	8	III	ガラス	0.60	0.70	0.65	0.35	
	1249	玉未製品	14	III	蛇紋岩	2.10	1.40	1.00	2.44	725
	1250	玉未製品	12	III	赤玉石	2.25	1.50	0.75	2.59	
	1251	玉未製品	6.5	表	ヘキ玉	1.6	1.5	1.3	3.14	

## 第VIII章 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、調査区のほぼ中央にK7～11区を中心に、掘立柱建物跡、配石遺構、土坑、畠跡などが、遺物包含層であるIIb層下面より検出された。

出土遺物は、土師器、瓦質土器などの土器や、櫛万丈窯系須恵器、中国陶器などの陶器、白磁、青磁などの磁器、羽口、取瓶などの土製品、滑石製品などの石器が調査区全体から広く出土している。割合的には、遺構検出地帯よりも、やや南側（K3～5区）から多く出土している。

### 第1節 検出遺構（第181～183図 1～3）

中世の遺構と考えられるものは、「第183図、中世の遺構分布図」に示したように掘立柱建物跡1棟、配石遺構1基、土坑・ピット1基、畠跡1枚が検出された。いずれも、遺物包含層であるIIb層下面より検出されたものが中心である。

遺構内からの出土遺物は少なく、白磁や滑石製品など遺構内出土遺物については、「第2節出土遺物」の項で他の遺物と一緒に取り扱った。

#### 1 中世の掘立柱建物跡（第181図）

K7区で、畠跡の南側に隣接するように検出された。建物の規模は2間×3間であり、一部搅乱部分もあり定かでないが9個のピットからなり、主軸は略南北方向である。桁行は約3.13m、梁行は約3.51mであり、柱間寸法は2.17m前後ではほぼ等間隔である。床面積はおよそ21.2m<sup>2</sup>であり、長方形の建物である。ピットは円形または楕円形を呈し、平均して径0.2×0.21m、深さ0.32mであり、ほぼ同規模である。柱の径は、残存部分が多く、柱痕跡も見あたらないことから不明であるが、ピット底径とはほぼ同規模のものと思われ、廃棄時に抜き取られた可能性も考えられる。

ピット中の埋土は、中世の遺物包含層であるIIb層の明褐色土であり、埋土中より白磁碗の口縁部（第185図33）が1点出土したが、その他に出土遺物は確認されなかった。

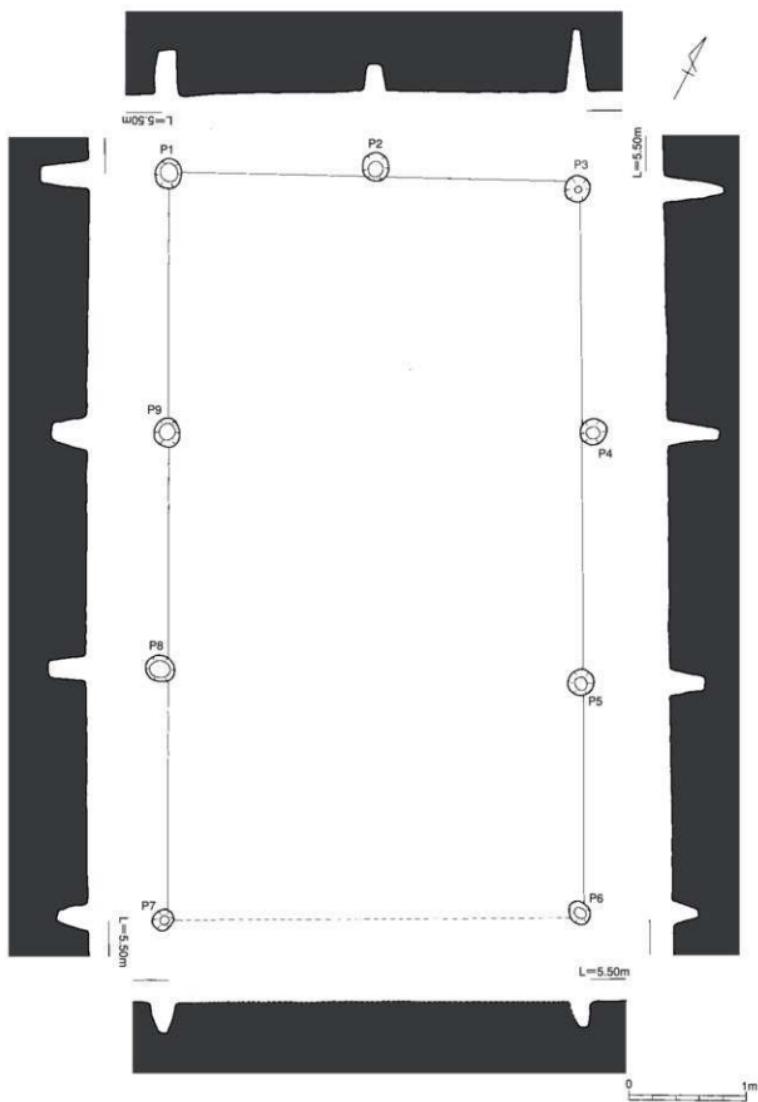
なお、掘立柱建物跡の建物規模、ピット形状などは、第50表に示した。

第50表 中世の掘立柱建物跡計測表

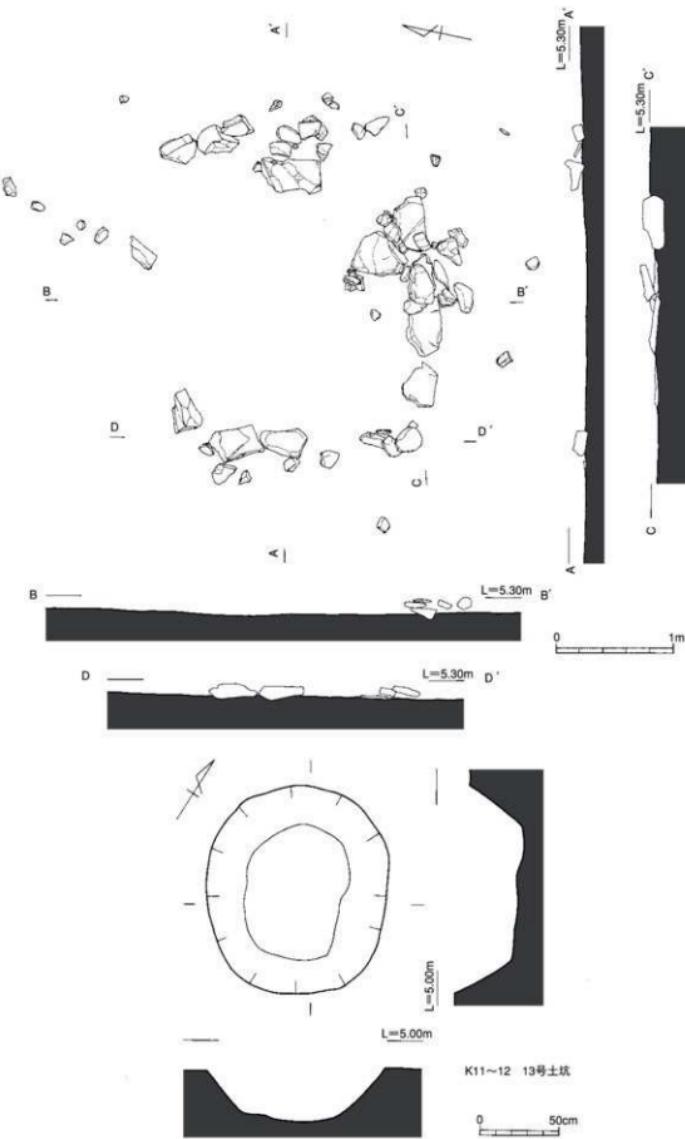
主軸方向	桁行(m)	梁行(m)	桁行柱間(m)	梁行柱間(m)	ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	
南北 N-29°-W	P1-P7 3.18	P1-P3 3.48	P1-P9 2.20	P3-P4 2.06	P1-P2 1.76	長径(cm)	20	24	20	23	23
	P3-P6 3.08	P7-P6 3.54	P9-P8 2.62	P4-P5 2.12	P2-P3 1.74	短径(cm)	23	22	22	21	22
			P8-P7 2.12	P5-P6 1.94	深さ(cm)	37	22	52	44	30	
					ピットNo.	P6	P7	P8	P9		
					長径(cm)	20	19	25	25		
					短径(cm)	18	17	23	22		
					深さ(cm)	22	26	32	30		

#### 2 配石遺構（第182図）

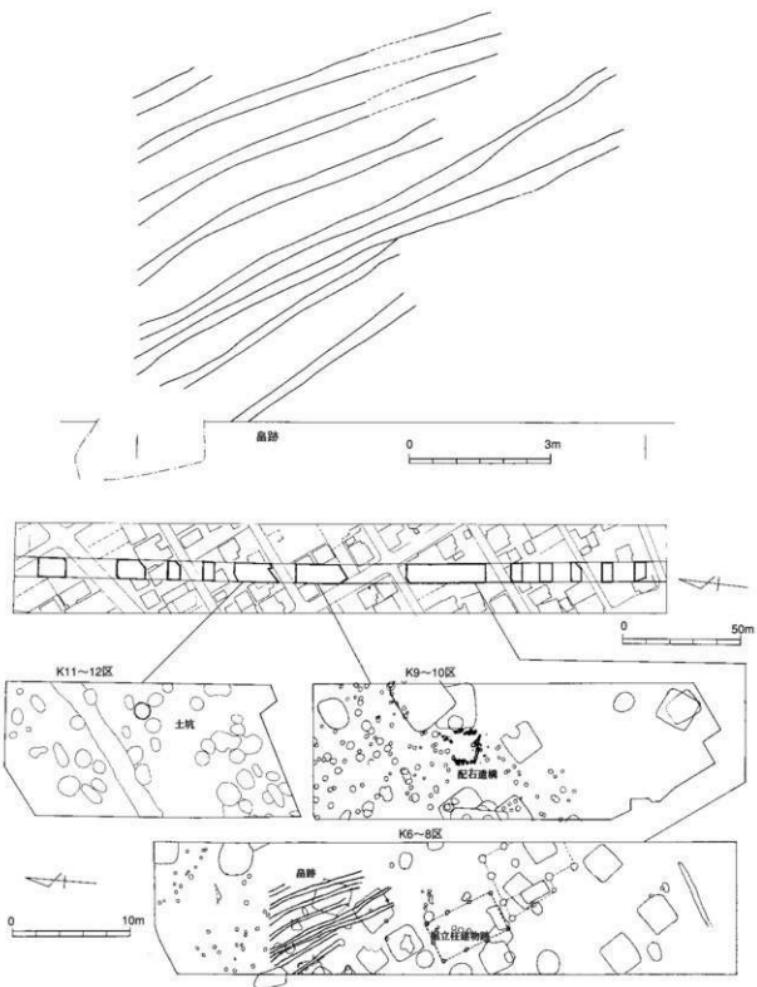
K9.5区で検出された。径42×26cm、厚さ12cm程度の比較的大型な平たい角礫から、径25×14cm、厚さ4cm程度の小さめの角礫などを直線的に並べたものである。平面形は長方形を呈し、遺構の規模は、南北約3.0m、東西約3.5mである。北東部分に石の移動が見られ、直線的に伸びるように見



第181図 中世の遺構1（掘立柱建物跡）



第182図 中世の遺構2 (配石遺構、土坑)



第183図 中世の遺構3（品跡） 中世の遺構配置図

えるが、遺構内に現代の擾乱部分があるなど、その後の堆積状況により動いたものと推察される。遺構内に掘り込みはなく、意図的に方形になるよう大小の礫を並べていることから、何らかの建物の基礎部分にあたる礎石の可能性も考えられる。

### 3 畠跡（第183図）

K7.5区で検出された。K7区で検出された掘立柱建物跡の北側に隣接している。近世以後に削平された部分も見られるが、畠の形状から調査区外へ大きく広がると思われる。検出された面積は、約87.6m<sup>2</sup>で、畠溝幅が約25cm、畠間は約70cm間隔で8条である。長さは検出状況が異なるが、1.8~11.6mである。埋土中より遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡と隣接していることから、関連が推察される。

### 4 土坑（第182図）

K11~12区で検出された。この調査区では、大きめの土坑が39基集中して検出され、時期的にも古墳~近世まで混在している。土坑の規模は、長径1.32m、短径1.16m、深さ0.33mの円形を呈し、埋土中より白磁碗の口縁部（第185図28）が出土した。

## 第2節 出土遺物（第184~186図 1~75）

中世の遺物は、遺物包含層であるⅡb層を主として数多く出土した。一部は、Ⅲ層の古墳~古代にかけての遺物と混じり合った状態で出土するものも少なくなかった。

出土した遺物は、土師器、瓦質土器、須恵器などの土器や、天目焼などの中世陶器や中国陶器などの陶器類、白磁、青磁、青白磁などの磁器類、取瓶、羽口などの土製品、滑石製品などと多彩である。

### 1 土器（第184図 1~23）

中世の土器は、調査区全体の南側を中心に出土した。出土したものはほとんどが土師器であるが、やや硬質な瓦器や、須恵器なども含まれている。

#### 土師器（第184図 1~9）

中世の土師器と思われるものは、K3~5区を中心に出土し、中心となるのは皿である。出土したものの中9点についてのみ図化した。

1~9は、土師器皿であり、底面の切り離しはいずれも糸切りである。浅黄橙色の精良な胎土を用い、胎土中に赤色砂粒が多く混じる。1、2は、底径が8~9cmと大きめの皿であり、底面からやや直線的に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。外面はヨコナデ調整を施し、底部と胴部の境目にわずかな凹みを持つ。1は、口径16.4cm、底径9.5cm、器高3.5cmである。2は、上部が欠損しているが1とはほぼ同じ器形と思われ、外面に黒斑が大きく見られる。

3は、内湾しながら立ち上がるるもので、低い充実気味の底面はわずかに張り出している。内面は中央が凹んだ球形状を呈している。内外面ともヨコナデ調整を施す。

4~9は、底径が5~7cm、器高0.9~1.4cm程度の小皿である。精製された胎土を用い、ヨコナ

テ調整で仕上げている。4は内面が灰褐色化し、灯明皿として使用された可能性がある。8は、底面の切り離し部分に張り出しが残る。

#### 瓦器（第184図 10、11）

10、11は、瓦器塊の口縁部である。精製された灰白色で硬質の胎土を用い、外面にナデ調整、内面にヘラミガキ調整を施している。口唇部を丸く仕上げ、外反せず直口する。10は外面にヨコナデ調整による稜が残る。内面は幅約3mmの太めのヘラミガキを施し、ミガキの隙間は見られない。11は、器面が摩滅しており、表面に空洞が見られる。

#### 須恵器（第184図 12～19）

須恵器は、出土総数12点中8点を図化した。器種は、甕、鉢、片口、捏鉢などで、全体的に低温焼成であり、胎土は瓦質に近い灰白色である。

12～14は甕である。12は、玉縁状を呈した口縁部で内外面ともナデ調整を施す。鉢の可能性もある。13、14は、内面にハケメ調整、外面に格子目状のタタキ調整を施す。16は、内面に櫛状工具による条痕が残る捏鉢である。17は、口縁部の一部を下方へ曲げ注口とした片口で、下位に縦方向のハケメ調整痕が残る。18は捏鉢の底部であり、内外面ともハケメ調整痕を丁寧にナデ消している。12～14、16～19は、櫛万丈窯系の須恵器である。

15は、外面に鋸歯状のタタキ痕が残るものである。

#### 陶器（第184図 20～23）

陶器は、調査区南側全体で出土している。出土した遺物は、国内で製作された中世陶器と、貿易により中国から輸入された中国陶器に大別される。

#### 天目塊（第184図 20）

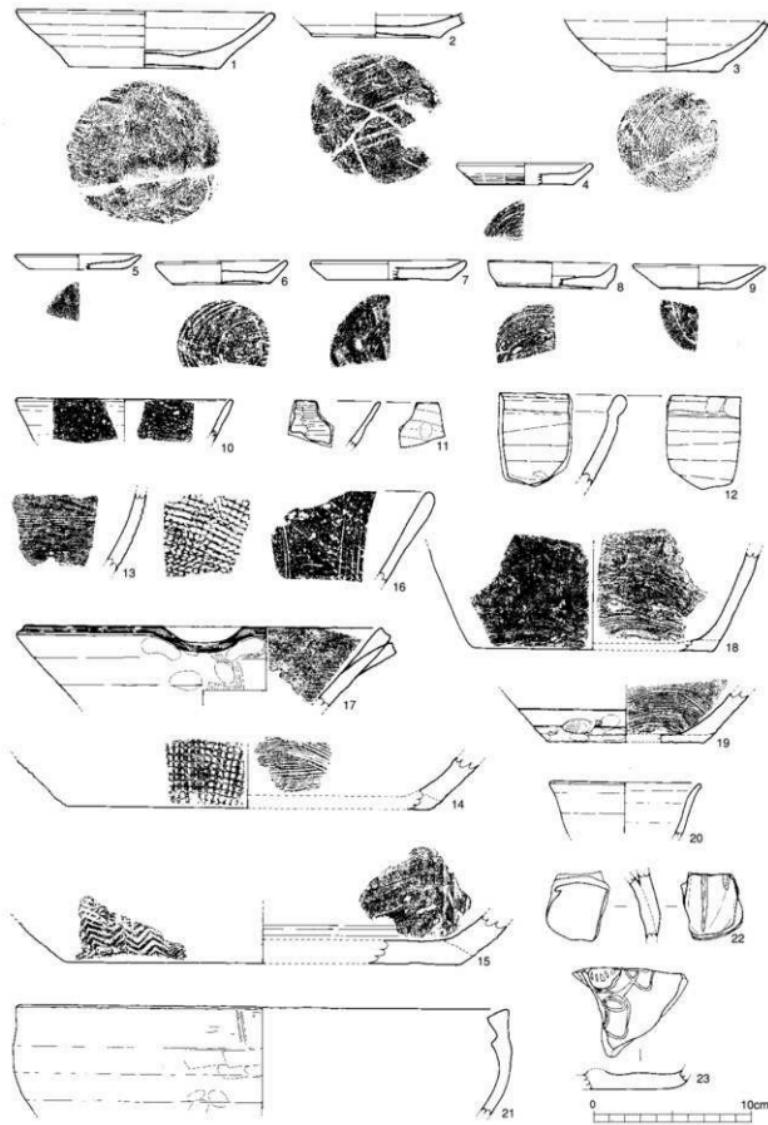
天目塊は、K2～3区、K8～9区で5点出土し、その中で1点について図化した。

20は、やや直線的に開く胴部が口縁部でわずかに外反する塊であり、口唇部を丸く仕上げている。全体に黒褐色の釉が掛かり、口縁部周辺は明緑灰色である。口唇部の釉は剥ぎ取られている。釉の発色が悪く、表面に細かい気泡が浮き出ている。口縁部のみの出土のため全体型は不明である。図化しなかったものもほぼ同程度の器形であると思われる。

#### 中国陶器（第184図 21～23）

貿易により輸入された中国陶器も、数多く出土している。総点数は42点であり、調査区の中央から南側にかけてやや集中が見られる。その中から3点について図化した。

21～23は、中国陶器である。21は、内湾しながら立ち上がり、口縁部が直口する鉢である。口唇部を肥厚させ平坦面を作り出し、内面に大きめの段を持つ。全体に褐釉が掛かるが、発色が弱い。胎土に白色砂粒を多く含み、外面にも浮き出ている。22は、外面に黒釉を施釉した取手であり、部分的な出土のため全体器形は不明であるが、水柱の取手であると思われる。取手中央に縦方向の沈線が2条施され、内面は無釉である。23は、内面に花文が描かれた盤である。花文の中心に粘土貼り付けにより凸部を作り出し立体的に仕上げている。淡茶白色の胎土に暗黄褐色の釉が内面に掛かり、南方系産の可能性があると考えられる。



第184図 中世の遺物1（土師器・須恵器他）

第51表 中世の遺物観察表1 (土師器・須恵器他)

持団番号	遺物番号	種別	器種	部位	胎土	調整		色調	焼成	法量(cm)			備考	出土区・層	注記番号
						内	外			口径	底径	通高			
1	土師器	皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	16.4	9.5	3.5	ほぼ完形	11T	III	586	
2	土師器	皿	胴～底	精製された胎土 (工具痕)	ヨコナデ系切り底	(内)灰白 (外)淡青	良好	-	8.6	-	黒班あり	11T	III	586	
3	土師器	皿	胴～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	(内)灰白 (外)淡青	良好	-	6.7	-	2/3個体	3	III	486 556	
4	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	褐	良好	8.6	6.4	1.4	1/4個体	4	III	858	
5	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	6.8	5.0	0.9	1/4個体	11T	III	450	
6	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	8.3	6.0	1.4	2/3個体	4	III	872	
7	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	9.9	7.8	0.9	1/3個体	4	III	921	
8	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	8.2	7.0	1.4	1/4個体	4	III	670	
9	土師器	小皿	口～底	精製された胎土 (砂粒少混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	8.2	4.6	1.2	1/4個体	3	III	768	
10	瓦器	塊	口縁部	灰白 (砂粒混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	13.8	-	-	表面に空洞	4	III	783	
11	瓦器	塊	口縁部	浅黄 (細粒混)	ヨコナデ系切り底	黄橙	良好	-	-	-	-	11T	III	384	
12	須恵器	甕	灰	灰白 (砂粒混)	ナデ系	灰白	良好	20.0	-	1.6	櫛万太系	4	III	630	
13	須恵器	甕	胴部	灰・灰白の互層 (細沙多混)	ナデ系	タタキ (灰白)	灰	良好	-	-	1.5	櫛万太系	5	-	1422
14	須恵器	甕	底部	灰・灰白の互層 (細粒)	ハケ目	タタキ (灰白)	灰白	-	23.0	-	櫛万太系	4	III	308	
15	須恵器	甕	底部	灰・灰白の互層 (砂粒多混)	ナデ系	タタキ (断面)	灰白	良好	-	25.0	-	ヘラ形調査面 小石を食す	5	IV	1477
16	須恵器	擂鉢	口縁部	灰白 (砂粒混)	ナデ系	灰白	やや良	-	-	-	櫛万太系	5	-	1422	
17	須恵器	片口	口縁部	灰白 (砂粒混)	ハケ目	ハケ目	灰	良好	23.6	-	櫛万太系	3	III	396	
18	須恵器	捏鉢	底部	灰・灰白の互層 (砂粒多混)	ハケ目	ハケ目	灰	良好	-	15.4	-	櫛万太系	5	-	1422
19	須恵器	鉢	底部	灰・灰白の互層 (細粒)	ハケ目	ナデ系	灰白	良好	-	10.0	-	櫛万太系	2	II	-
20	陶器	塊	口～胴	灰白 (細粒混)	ナデ系	ナデ系	黑褐	やや良	9.6	-	大口直筒瓶	11T	III	59	
21	中国陶器	鉢	口縁部	暗灰 (白細粒多混)	ナデ系	ナデ系	淡黄 (白)	良好	31.2	-	褐色	12	III	783	
22	中国陶器	水注	取手	灰褐色 (白細粒混)	ナデ系	ナデ系	淡黄 (白)	良好	-	-	黒釉	9.5	2b	一括	
23	中国陶器	蓋	口縁部	淡茶色 (やや精良)	ナデ系	ナデ系	淡黄 (白)	良好	-	-	墨色釉・青入有 内面に花文	12	III	741	

## 2 磁器 (第185図 24~65)

磁器は、白磁、青白磁、青磁に分けられる。調査区全体から出土しているが、K2~5区とK8~10区、K12~14区にやや集中が見られる。それぞれの項では、器種ごとに説明を行う。また、分類については、太宰府土器型式に基づき行った。

## 白磁 (第185図 24~44)

白磁は、全調査区で117点出土し、21点について図化し、器種は、碗、小碗、皿などである。

## 碗 (第185図 24~39)

24は、碗の蛇の目高台を持つ底部であり、精良な乳黃灰色の胎土に、表面が滑らかな乳白色の釉が掛かるもので、体部下位から高台にかけて無釉である。8~9世紀のものと思われる。

25、26は、口縁部周辺に横ナデ調整を施した玉縁口縁である。25は、内湾する体部外面中位に、工具痕が2条沈線状に巡っている。黄白色の釉が全体に掛かり、口縁部外面に釉垂れが見られる。26は、釉の発色が弱く表面に細かい凹凸が残る。

25~29は、肉厚な玉縁口縁を持ち、削り出しの浅い幅広な高台を呈するものである。25、28は、

口縁部外面に明瞭な段を持つ肉厚な玉縁口縁であり、釉の発色が弱く表面がざらついている。29は、厚めに施釉され発色が良く滑らかである。30～32は、削り出しの浅い肥厚な底部で、体部外面下位以下は無釉である。30は、高台内面を斜めに浅く削る。黄灰色の粗い胎土であり、外面に無数の小空洞が見られる。31は、メンコの可能性も考えられる。32は、やや精良な胎土で、高台断面は方形に近い。32は、高台内面に広い平坦面を持ち、周辺が大きく凹み段を持つ。灰白色の胎土は粗く、表面に空洞や凹凸が残る。体部外面下位に工具痕が縞模様に残っている。

33、34は、細く高い高台を持ち、胴部下位で膨らみ口縁部へ向かって延びるもので、口縁端部は小さく屈曲するものである。33は、わずかに外反し、口唇部が尖るもので、口縁上部を水平にしている。体部中位内面に短い櫛目で花文が描かれ、外面に細長い空洞が數カ所残る。34は、体部外面下位まで掛けられた灰白色的釉が、高台部分まで一部掛かっている。

35は、やや小さめの断面方形の高台で、高台内に段を持つ。高台外面の一部まで釉が掛かり、高台内面見込みに青灰色の文様が描かれる。

36～38は、内面見込みの釉を環状に搔き取った、蛇の目釉剥ぎの残る底部である。36は、灰白色の胎土に黄白色の釉が高台外面近くまで掛かるもので、一部豊付部まで釉垂れしている。釉剥ぎ部分に熔着が残る。37は、高台の削り調整が粗く、表面に凹凸が残る。見込みに段は持たない。38は、明褐色の胎土に灰白色の施釉で、見込みに段を持つ。蛇の目釉剥ぎ部には、重ね焼きによる別個体の釉が付着している。

#### 小碗（第185図 40、41）

40、41は、体部が丸く腰が張り、口縁部が外側に大きく屈曲する小碗の口縁部である。灰白色的硬質の胎土に白色の施釉で、表面が光沢を持ち滑らかであるなど上質な仕上がりである。

#### 皿（第185図 39、42、43）

39は、精製された胎土に精白色の釉が掛かる皿であり、やや外反する口縁部周辺の釉を施釉後搔き取り、口縁部を口禿げとしたものである。

42は、体部下位に丸みを持ち直線的に延びる直口皿の口縁部である。体部外面にヘラ削り調整痕が明瞭に残り、下位以下は無釉である。43は、やや上げ底状の平底を呈する皿の底部であり、胴部と底部の境目が明確である。内面に環状の凹みと見込み中央に芭蕉文が描かれる。

#### 水注（第185図 44）

44は、全体型は不明であるが、膨らみのある胴部が頭部で締まり、口縁部がやや外反する水注の口縁部であると思われるもので、幅広の取手が貼り付けられている。胎土は微細な黒色粒を含んでいる。全面に浅黄色の釉が掛かるが、内面は口縁部付近のみの施釉である。

#### 青白磁（第185図 45～47）

青白磁は、全調査区で出土した12点中3点について図化し、碗、壺、合子などがある。45～47は、灰白な胎土に明青灰色の釉が掛かる青白磁である。45は、大きく開いた体部が、下部で屈曲し直線的に立ち上がる碗であり、外面に明瞭な稜を持つ。屈曲部内面に段を持ち、外面に細い圈線が1条巡る。46は、底面中央が凹む基筒底を呈する壺の底部である。明緑灰色の厚めの釉が掛かるが、体部下位以下と内面は無釉である。内面に回転ケズリ調整の痕が残り、釉が垂れて付着している。47は合子の蓋の一部と思われるもので、上面に花文が浮き彫りされている。

### **青磁** (第185図 48~65)

青磁は、全調査区で182点出土した。器種は、碗、坏、皿、壺などである。さらに、青磁は龍泉窯系青磁と同安窯系青磁、初期高麗青磁に大きく分け、各種別ごとにまとめた。

#### **龍泉窯系青磁** (第185図 48~60)

龍泉窯系青磁は、全調査区で出土した158点中13点について図化した。

##### **碗** (第185図 48~57)

48, 49は、高台断面がほぼ方形で、内部のケズリが浅く肉厚な底部である。高台外面まで施釉を行い、高台内は無釉である。48は、青緑色の釉が掛かり、釉の一部が高台疊付から内面にまで垂れている。49は、浅黄色の釉が掛かり、内面見込みに梢円形の目跡が残る。

50は、直口する肉厚な口縁部で、内面上位に沈線が1条巡り、中位に片彫蓮花文を有する。

51, 52は、内面に片彫りによる草花文と櫛目文が描かれたものである。51は、口縁部でわずかに外反する。52は、内面の体部との境目に段を持つ。

53, 54は、体部外面に鏽蓮弁文を持つもので、弁の中心は稜を呈する。53は、やや反り気味の口縁部であり、施釉が厚い。54は、口縁部を肥厚させ、明緑灰色の施釉に気泡が混じる。

55は、全面施釉後高台疊付けの釉を拭き取ったもので、高台内に窯道具の焼着が残る。

56は、高台内面見込みに「人月」の文字を印刻した厚みのある底部である。

57は、高台径が小さく、高台断面が先細りで、高台内見込みに草花文を施したものである。

##### **坏** (第185図 58)

58は、高台が先細りし尖る坏の底部で、高台内が無釉であり、高台外面に凹みが巡る。内面に幅広の沈線が環状に巡り、高台内に回転ケズリ調整痕が筋状に残る。

##### **皿** (第185図 59)

59は、口縁部が外反する皿の口縁部である。内外面に草花文が施されている。

##### **壺** (第185図 60)

60は、袋状をした壺の胴部と思われるもので、内面は無釉であり、筋状の調整痕が残る。

#### **同安窯系青磁** (第186図 61~64)

同安窯系青磁は、全調査区で出土した24点中4点について図化した。

##### **碗** (第185図 61~63)

61, 62は、逆台形状の高台を持ち、内湾しながら立ち上がる碗であり、体部下位以下は無釉である。61は、内面に片彫りの草花文とジグザグ状の点描文、外面に細めの櫛目文を施す。62は、高台内面の見込みと体部との境目に段を有する底部であり、胎土が粗く、空洞が目立つ。

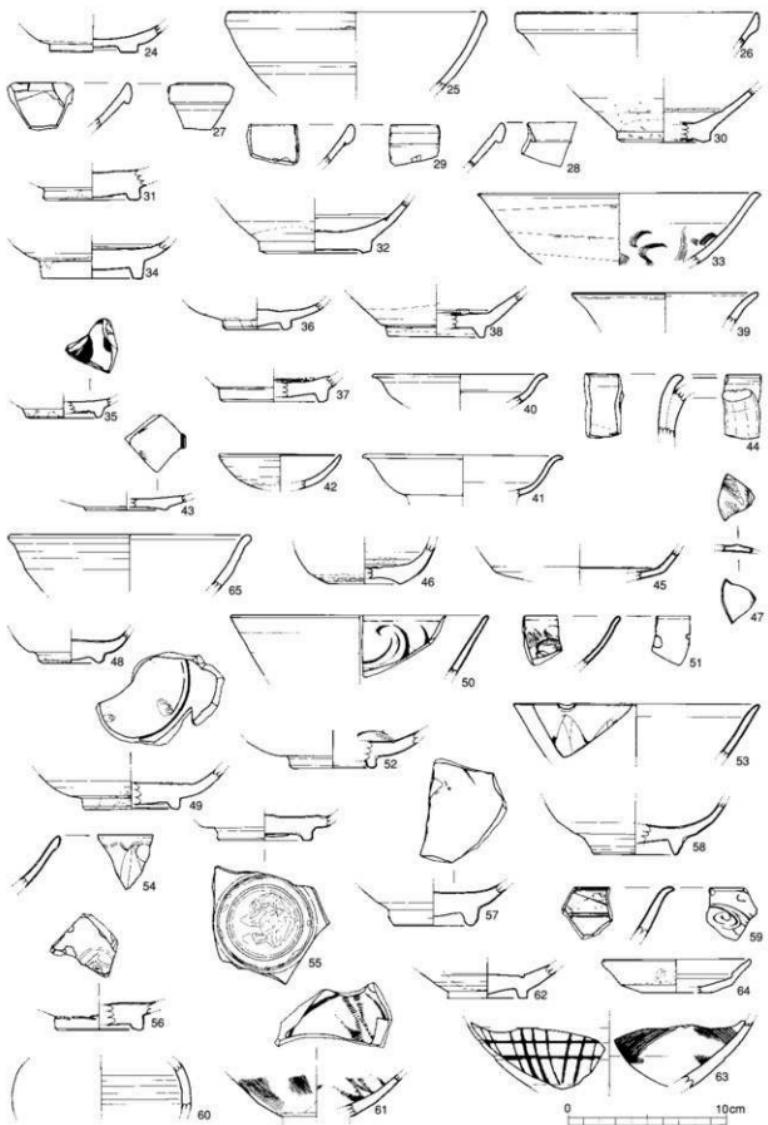
63は、内面に櫛状工具による花文、外面に片彫りの箆状工具による沈線を施している。

##### **皿** (第185図 64)

64は、口縁部外側が内傾し尖り気味の皿である。外面中位で屈曲し、内側見込みと体部の境目に段を持つ。浅黄色の釉が掛かり、外面中位以下は無釉である。

#### **初期高麗青磁** (第185図 65)

65は、灰色の胎土に不鮮明で光沢のない灰緑色の釉が掛かる初期高麗青磁の碗である。口縁部がわずかに外反し、肥厚である。外面に横ナデ調整の凹凸が残る。



第185図 中世の遺物2 (磁器)

第52表 中世の遺物観察表2(磁器)

排図番号	遺物番号	種別	器種	部位	分類	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	貫入	発色	法量(cm)			備考	出土区・層	注記番号		
												口径	底径	高さ					
185回	24	白磁	碗	底部	I-2	乳黃 (灰褐色)	乳白	高台、胴部 下位以下	良	無	有	-	5.6	-	乾の目高台	9.5	H6	1786 2057	
	25	白磁	碗	口縁部	II-1	灰白 (細網目)	黄白	無	良	無	有	16.6	-	-	玉縁	3	III	382	
	26	白磁	碗	口縁部	II-5	灰白 (細網目)	黄白	無	良	無	弱	15.4	-	-	玉縁	11T	III	261	
	27	白磁	碗	口縁部	IV	黄白 (細網目)	灰白	無	やや良	有	弱	-	-	-	玉縁	12	-	-	
	28	白磁	碗	口縁部	IV	黄白 (細網目)	灰白	無	やや良	有	弱	-	-	-	玉縁	12	P	1003	
	29	白磁	碗	口縁部	IV	灰白 (細網目)	綠白	無	良	無	有	-	-	-	玉縁	3	III	162	
	30	白磁	碗	底部	IV-1a	灰白 (細網目)	灰白	胴部	やや良	有	弱	-	5.9	-	輪高台 削り浅い	12	II b	766	
	31	白磁	碗	底部	IV-1a	灰白 (細網目)	灰白	高台脛付 ~内	やや良	無	弱	-	6.2	-	輪に気泡	4	III	196 1422	
	32	白磁	碗	底部	IV-1b	灰白 (細網目)	浅黄白	胴部 下位以下	良	無	有	-	7.1	-	沈縁 輪高台	11.5	表	-	
	33	白磁	碗	口縁部	V-4b	灰白 (細網目)	灰白	無	良	無	有	18.0	-	-	空洞 (外側)	3	III	341 819	
	34	白磁	碗	底部	V-1a	灰白 (細網目)	灰白	胴部	良	無	有	-	6.4	-	見込み段	5	-	1422	
	35	白磁	碗	底部	VI-2	黄白 (細網目)	黄白	胴部 下位以下	やや良	有	弱	-	4.8	-	一部輪削れ 内面見込(花文)	13	III上	-	
	36	白磁	碗	底部	VI-1	灰白 (細網目)	黄白	胴部 下位以下	良	有	弱	-	4.4	-	見込(乾の目輪削り)	2	III	37 59	
	37	白磁	碗	底部	VII-1	灰白 (細網目)	灰白	胴部 下位以下	良	無	有	-	6.8	-	一部輪削れ 他個体の輪削若痕	4	III	170	
	38	白磁	碗	底部	VII-3	灰白 (細網目)	灰白	胴部 下位以下	やや良	有	無	-	6.2	-	乾の輪削り、輪削若痕 別個体の輪削若痕	4	III	641	
	39	白磁	皿	口縁部	IX	灰白 (細網目)	青白	無	良	有	有	11.8	-	-	口壳げ	11T	III	572	
	40	白磁	小碗	口縁部	XIVa	白 (細網目)	灰白	無	良	無	有	11.1	-	-	中位に圓縁 口縁部外反	6.5	II b	861	
	41	白磁	小碗	口~胴	XIVa	灰白 (細網目)	白	無	良	無	有	12.7	7.2	-	口縁部外反	14T	III	336	
	42	白磁	皿	口~胴	VI-1b	黄白 (細網目)	白	胴部 下位以下	良	有	有	7.8	-	-	-	1	III	-	
	43	白磁	皿	底部	VII-2b	灰白 (砂鉄混)	黄白	底部 下面	良	有	有	-	5.0	-	蕉葉文(見込)	3	III	794	
	44	白磁	水注	口縁部	-	灰 (無地)	浅黄	頸部 以上	良	有	弱	-	-	-	-	8	III	811	
	45	青白磁	碗	胴部	-	灰白 (細網目)	明青灰	無	良	無	有	-	-	-	沈縁	11T	III	473	
	46	青白磁	盞	底部	-	灰白 (細網目)	明緑灰	内面胴部 下位以下	良	無	有	-	4.5	-	輪液垂れ痕(内面)	12	III	785	
	47	青白磁	合子	蓋	-	灰白 (細網目)	明青灰	外面煙部	良	無	有	-	-	-	花文(外面)	3	III	-	
	48	龍泉窯 青白磁	碗	底部	III-1A	灰白	青綠	高台内	良	有	有	-	4.2	-	-	5	-	1422	
	49	龍泉窯 青白磁	碗	底部	I-1a	灰白	オリーブ灰 浅黄	蒙皮付 高台内	やや良	無	弱	-	6.2	-	見込(目跡、刻綱)	5	III	1162	
	50	龍泉窯 青白磁	碗	口~胴	I-2a	灰白	灰オリーブ	無	良	無	有	16.4	-	-	片剥蓮花文(内)	4	III	340	
	51	龍泉窯 青白磁	碗	口縁部	I-3a	灰白	オリーブ	無	良	有	有	-	-	-	雪文(欄目(内))	11	III	225	
	52	龍泉窯 青白磁	碗	底部	I-3a	灰白	オリーブ	無	良	有	有	-	5.6	-	雪文(欄目(内))	3	III	438	
	53	龍泉窯 青白磁	碗	口~胴	II-b	灰白	青綠	無	良	無	有	15.6	-	-	舎蓮弁文	9.5	II b	103	
	54	龍泉窯 青白磁	碗	口縁部	II-b	浅黄	明緑灰	無	良	有	弱	-	-	-	舎蓮弁文(外)	14	III	150	
	55	龍泉窯 青白磁	碗	底部	II	灰	オリーブ灰	無	良	有	有	-	6.0	-	目跡、黒道追帶 置付輪ふきとり	2	II	-	
	56	龍泉窯 青白磁	碗	底部	II	灰	オリーブ灰	高台内	やや良	有	有	-	6.2	-	又田印(人丸)(見込文)	5	表	-	
	57	龍泉窯 青白磁	碗	底部	III	灰白 (細網目)	明黄	高台内	良	有	有	-	5.7	-	連弁文(内面見込)	14	II	129	
	58	龍泉窯 青白磁	坏	胴~底	III-1a	灰白 (細網目)	灰白 オリーブ	高台内	良	有	有	-	5.5	-	高台内ろくろ目	14	III	120	
	59	龍泉窯 青白磁	碗	口縁部	-	灰白	淡黄綠	無	良	有	有	-	-	-	草花文(内・外)	12	III	276	
	60	龍泉窯 青白磁	盞	胴部	-	灰 (細網目)	灰オリーブ	無	良	無	有	-	-	-	ろくろ目	3	III	780	
	61	同安窯 青白磁	碗	口縁部	I-1b	灰白	灰オリーブ	胴部下位 以下	良	無	有	-	-	-	ジタザタ状の点描文	4	III	360	
	62	同安窯 青白磁	碗	底部	I	灰白 (細網目)	灰白 オリーブ灰	胴部下位 以下	良	有	有	-	5.1	-	-	欄目文(外)	13	上	-
	63	同安窯 青白磁	碗	口縁部	III-1b	灰 (細網目)	オリーブ灰	無	良	有	有	-	-	-	欄状工具による花文	5	-	1422	
	64	同安窯 青白磁	皿	口~底	I-1a	灰白 (細網目)	浅黄	胴部下位 以下	良	有	有	9.4	4.4	2.1	-	3	III	723	
	65	初期高麗 青白磁	碗	口縁部	III-2A	灰 (細網目)	灰黄	無	やや良	有	弱	15.4	-	-	-	9.5	II b	-	

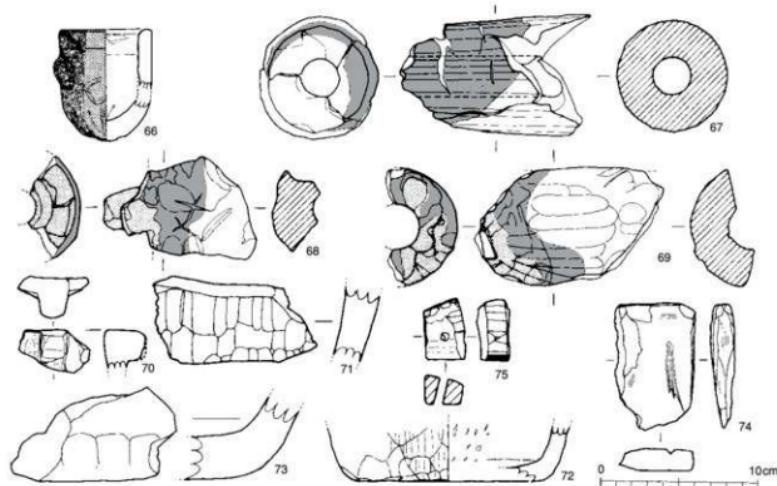
### 3 土製品・滑石製品 (第186図 66~75)

土製品は、取瓶、羽口などであり、K5~8区で5点、K9~10区で8点の計13点出土した。

66は取瓶である。溶融した金属を溶鉱炉から取り出す、または鋳型へ流し込む際に垂れて付着したと思われる金属が外面全体を覆い、光沢を持つ鉛色の黒色と赤褐色2色に変色している。

羽口は、67~69の3点図化した。取付部の外面が熱作用を受け黒色化し、一部ガラス質が熔着している。砂粒の混ざる粗めの胎土で、直径約7cmとほぼ同規模である。

滑石製品は、出土した39点中6点について図化した。70~73は、滑石製石鍋の破片であり、外面ともとケズリ調整を施し、外面に調整痕が明瞭に残る。74、75は、石鍋片の破断面をケズリ直し、再加工した転用品であると思われる。75は、中央に直径6.0mmの穿孔を有する。



第186図 中世の遺物3 (土製品・滑石製品)

第53表 中世の遺物観察表3 (土製品・滑石製品)

種類番号	遺物番号	種別	器種	部位	胎土	調整		色調	焼成	法量(cm)			備考	出土区・層	注記番号	
						内	外			D径	底径	高さ				
186 図	66	土製品	取瓶	口～底	青灰・黄褐 (小穴あり)	ナ・デ (金属物)	ナ・デ (自然物)	赤褐色 (金属物)	良好	5.9	2.6	—	外面上に自然物による光沢有り	5	表土	一括
	67	土製品	羽口	円筒型	やや粗	ナ・デ	ナ・デ	赤褐色 (自然物)	良好	7.5	2.4	12.0	スズ付着	6.5	西壁 (380)	22
	68	土製品	羽口	1/2	やや粗 (細砂混)	ナ・デ	ナ・デ (陶物)	灰白	やや良	7.6	2.2	9.1	スズ・ガラス質付着 小石を含む	9.5	III	1305
	69	土製品	羽口	1/3	粗 (砂粒混)	ナ・デ	ナ・デ (陶物)	浅黄褐色 灰黒	やや良 (鐵)	7.4	2.8	12.1	スズ・ガラス質付着 小石を含む	10	III	1743
	70	滑石製品	鍋	口縁部	—	ケズリ 研磨	ケズリ	灰白	底大(廣大輪) 2.5	4.5	2.6	—	—	12	—	—
	71	滑石製品	鍋	胴部	—	ケズリ	ケズリ	灰白	底大(廣大輪) 4.7	9.6	2.3	—	—	9.5	II b	194
	72	滑石製品	鍋	底部	—	ケズリ	ケズリ (内) (外)	灰白 黒褐	底大(廣大輪) 3.3	11.8	1.2	—	—	12	III	551
	73	滑石製品	鍋	底部	—	ケズリ	ケズリ (内) (外)	灰白 黒褐	底大(廣大輪) 5.8	10.5	2.6	煤付着	9	II	237	
	74	滑石製品	加工品	—	—	ケズリ面	4面	灰白	底大(廣大輪) 7.9	5.1	1.5	石鍋片の転用	5	IV	60	
	75	滑石製品	加工品	—	—	ケズリ面	2面	灰白	底大(廣大輪) 3.7	2.6	2.1	石鍋片の転用 穿孔あり	7	掘立建物	P 4	



第187図 中世の遺物出土分布図

## 第Ⅸ章 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、K6～8区に方形堅穴状遺構、井戸状遺構、K11～13区に土坑と溝状遺構が、遺物包含層であるⅡ層下面より検出された。

出土遺物は、陶器、磁器、瓦、窯道具、羽口、鉄製品などが、調査区全体から広く出土している。

### 第1節 検出遺構（第188、189図 1～5.10）

近世の遺構と考えられるものは、第189図の遺構分布図に示したように、方形堅穴状遺構2基、井戸状遺構3基、溝状遺構1条、土坑3基の計9基が検出された。

遺構内からは、染付碗、陶器の壺、鉢、羽口、庖丁が出土しており、遺構内遺物の総数は6点である。時期的に異なる遺物も多く含まれていたが、何らかの原因で流れ込んだものと思われる。

遺構内出土遺物については、この項で遺構と同時に紹介する。

#### 1 方形堅穴状遺構（第188図 1, 10）

K6.5区で2基検出された。井戸状遺構群の東側に位置し、方形堅穴状遺構1号の形状は、長径3.9m、短径1.2mの長方形を呈し、主軸の方位は北西～南東である。方形堅穴状遺構2号の形状は、長径2.3m、短径0.9mの長方形を呈し、主軸の方位は北東～南西である。1号と2号との距離は2.2mと近く、主軸が直角方向に向いていることから何らかの関連があると推察される。1号は比較的検出状態が良かったが、2号は搅乱があり床面などの検出ができなかった。

方形堅穴状遺構1号は、検出面からの深さが0.4mであり、床面は平坦で硬化面を持つ。床面に計6個のピットが約0.9m間隔で規則的に配置され、左右で掘り方が異なり、片側の3個は二段掘りである。ピットの大きさは、小ピットが長径18.1cm、短径14.0cm、深さ65.2cm、大ピットが長径29.1cm、短径25.6cm、深さ63.3cmで、中位に段を持つ。柱を持つ建物の可能性もあるが、詳細は不明であり、ここでは方形堅穴状遺構として取り扱った。

出土遺物は羽口と鉄製利器である。1は胎土中に小石や磁器片を含む粗いもので、硬質であり、外面に細かいものと粗めのナデ調整痕の2通りが明瞭に残る。先端は熱により変形し、ガラス質の付着が見られる。10は、長さ24.5cm、幅3.5cmの長方形を呈した鉄製利器である。断面形態は細長い三角形であり、片方に刃部を持つ刃物であると思われる。中子と先端部は欠損している。

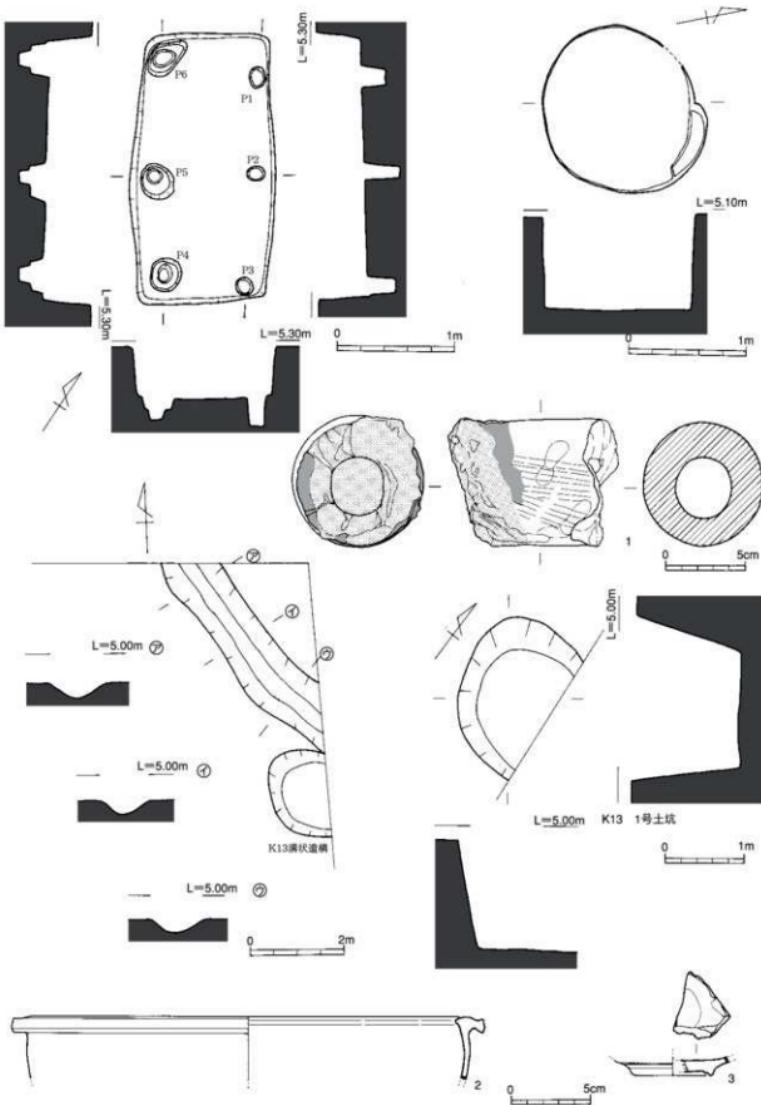
#### 2 井戸状遺構（第188図）

K6.5～7区で3基検出された。方形堅穴状遺構の西側に位置し、東側壁側に沿って並んで検出された。井戸状遺構1号の形状は、長径1.4m、短径1.3mの円形を呈し、検出面からの深さは0.8mである。2号、3号とも多少大きさは異なるが、同一形状を呈する。

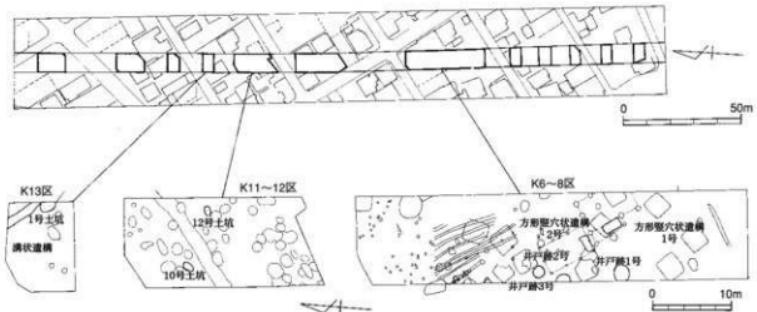
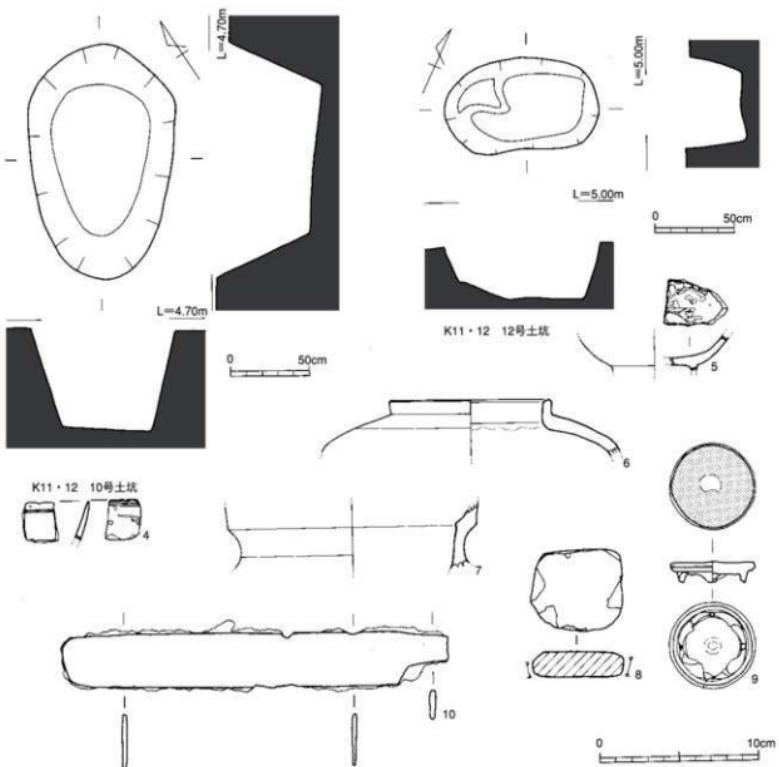
#### 2 溝状遺構（第188図 2）

近世の溝と考えられる遺構は、K13区の1号土坑に近接するように検出された。方位は、略北西～南東であり、K13調査区北東部分の角を横切るように位置する。検出された長さは6.1m、幅が約2.0m、深さ約0.1mであり、断面形態は東側が浅い逆三角形、西側がレンズ状を呈し、南東から北西方向へ向かって緩やかに傾斜している。

出土遺物は、陶器の鉢の口縁部である。2は全面に褐色の掛かるもので、膨らみを持つ胴部が口



第188図 近世の遺構と遺物1（方形竪穴状遺構、井戸跡）



第189図 近世の遺構と遺物2（土坑） 近世の遺構配置図

縁部で大きく屈曲し、垂れ気味に外反する。内側が張り出し、口唇部は面取りされている。口縁部上面に楕円形の貝目が残る。

### 土坑（第188、189図 3～5）

近世の土坑と考えられるものは、K11～13区で3基検出された。

K11～12区の10号土坑は、長径1.5m、短径0.9m、深さ64.5cmの楕円形、底面は平坦である。12号土坑の北側に位置する。埋土中より染付碗の口縁部が出土した。4は直口する碗であり、精良な胎土に透明釉が掛かる。口縁部外面に太めの圈線が1条巡り、外面上位には草花文が描かれる。

K11～12区の12号土坑は、長径0.9m、短径0.6m、深さ34.5cmの楕円形、底面は上げ底氣味で、西側に段を持つ。10号土坑の南側に位置する。埋土中より染付碗の底部が出土した。5は、砂粒混じりの粗い胎土であり、内面見込みに細い黒線と淡青緑色を組み合わせた花文が描かれる。

K13区の1号土坑は、東側が調査区外へ延びるもので、検出された部分は、長径0.9m、短径0.7m、深さ67.5cmであり、全体型は不明であるが、円形または楕円形を呈すると思われる。底面は平坦である。埋土中より陶器碗の底部が出土した。3は、淡黄色の精良な胎土に釉が掛かり、底部内面見込みに文様が描かれる。高台内は、無釉である。

### 第2節 出土遺物（第189図 6～10）

近世の遺物は、全調査区から広く出土しているが、ここでは5点について図化した。

6は、張りのある胴部が頸部で強く縮まり、短い口縁部が直立する壺である。口唇部を丸く仕上げ、外表面ともヨコナデ調整を施す。外表面と口縁部内面に灰黄褐色の施釉を行う。

7は、体部形態は不明であるが、頸部で緩やかに縮まり口縁部が外反した後直口氣味に延びるもので、砂粒の多く混じる胎土の瓦質陶器に近いことから、火鉢の頸部の可能性がある。

8は、近世瓦片の周辺を擦り、長径5.1cm、短径5.8cm、厚さ1.6cmの方形に仕上げたもので、稜が摩耗して丸く成っていることから、メンコなどの遊具として使用されたと思われる。

9は、窯道具のハマである。全体で4個出土している内1個について図化した。完形品であり、直径5.4cmの円形をした盤に切高台が付くものである。上面はほぼ平坦であるが、中心部がわずかに隆起し、中心部を除く上面全体に焼着防止のためのアルミニナが塗られている。

第54表 近世の遺物観察表

神奈 番号	遺物 番号	種別	器種	部位	胎土	調整		色調	焼成	法量(cm)			備考	出土区・層 番号
						内	外			口径	底径	器高		
188 図	1	土製品	羽口	円筒型 (砂粒混)	粗 粘	ナデ	ハケ目・ナデ (指圧痕)	灰白	良好	3.2 (硬質)	7.2 -3.6 -7.8	10.8 スス・ガラス質付着 小石・施器片含む	6.5 近世 一括	
	2	陶器	鉢	口縁部	灰白(白)の互層 (細砂混)	ヨコナデ	ヨコナデ	暗オーブ	良好	30.0	-	-	口唇部に貝目	13 溝3 一括
	3	陶器	壺	底部	淡黄 (精良な胎土)	文様 (見込み)	圈線1条	淡黄	良好	-	5.1	-	白色釉 高台内無釉	13 土1 1
189 図	4	磁器	碗	口縁部	灰白色精良	輪轂目 (草花文)	ナデ	青白	良好	-	-	-	透明釉 無施器箇所あり	12 P 974
	5	磁器	碗	底部	灰白 (細砂混)	花文	ヨコナデ	白	良好	-	5.3	-	買入あり 高台欠損	12 P 1042
	6	陶器	壺	口縁部	灰白 (砂粒混)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	灰黄褐	良好	10.8	-	-	工具痕あり	9.5 土2 3989
	7	陶器	鉢	頸部	浅黄褐 (砂粒多混)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	黒褐	良好	-	-	-		6.5 III 1036
	8	瓦	メンコ	完形	粗 (砂粒多混)	ナデ	ナデ	暗灰 黒褐	良好	(民) 5.1	(輪) 5.8	(原) 1.6 (4面)	周辺を擦る	9.5 I
	9	窯道具	ハマ	完形	灰白色精良	ナデ (輪轂目)	ナデ (輪轂目)	浅黄白	良好	(上部) 5.4	(輪) 4.2	1.3 上面にアルミニナ付着	5 IV 701	
	10	鉄製品	鉄製 利器	刃部	-	-	-	暗茶褐色	-	(民) 24.5	(輪) 5	(原) 0.4	表面に木片付着	6.5 近世 遺物

## 第X章 分析・同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 大島遺跡出土種実の種類

#### 1. 試料

試料は、第55表に示した4遺構より出土した種実遺体で、プラスチックケース12点に収められている。同一試料名が記された試料は一括する。

#### 2. 分析方法

試料を双眼实体顕微鏡下で観察し、種実や炭化材などの植物遺体を抽出する。種実遺体を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等との比較から、種類の同定・計数をおこなう。碎片を含み数字以上の個体数が推定される種類は、表中に「数字+（プラス）」と示した。同定後の種実遺体等は種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れ保存する。

#### 3. 結果

結果を第55表に示す。種実遺体の状態は比較的良好である。木本1種類（モモ）、草本3種類（アワーヒエ、コムギを含むムギ類、イネ科）の種実が同定されたほか、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、部位・種類共に不明の炭化物を示す）、昆虫遺骸の破片、不明物質が検出された。以下に同定された種実遺体の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

<木本>

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形、半分が検出された。広楕円形でやや偏平、先端部はやや尖る。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れている個体がみられる。K7区深掘り層から検出されたモモは、灰褐色。完形個体は長さ27mm、幅16mm、厚さ11mm。半分個体は長さ23mm、幅17.5mm程度。K9～10区P114層から検出された個体は完全に炭化しており、黒色。長さ17mm、幅13mm程度。

<草本>

・アワーヒエ (*Setaria itarica* Beauv.-*Echinochloa crus-galli* Beauv.) イネ科

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。広楕円体でやや偏平。径1.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。表面はやや平滑。遺存状態が悪く内外殻を欠損するため、種までの同定是不可能であった。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。楕円形で全体的に丸みを帯びている。長さ3mm、径2mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

#### ・ムギ類

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。紡錘状長楕円形で先端部は尖り、基部は丸い。長さ5mm、幅3.5mm、厚さ3mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。オオムギ属オオムギ (*Hordeum valgale L.*) に似るが、頂部を欠損し遺存状態が悪いため、ムギ類にとどめた。

#### ・イネ科 (Gramineae)

穎が検出された。淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ2mm、幅1mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縱列する。

### 4. 考察

大島遺跡から出土した種実遺体には、栽培植物が認められた。モモ、アワ、コムギは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種である（南木、1991）。モモは、中国からの渡来種とされ、觀賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。穀類のアワーヒエ、コムギを含むムギ類は、胚乳が食用とされる。本遺跡からの穀類の検出も、そのような事例であろう。

このように、栽培植物が全て炭化した状態で、遺構から出土した状況を考慮すると、本遺跡近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用していたものが火熱を受け、残存したものと推定される。なお、イネ科は集落周辺の明るく開けた場所に生育していたに由来すると思われるが、低湿地遺跡など特別な場合を除けば、炭化していない限り種子は残らないといってよく、解析に関しては炭化種子以外を除外して考えた方が妥当だという意見もある（吉崎、1992）。今回検出されたイネ科の穎は、炭化がみられず遺存状態が良好であることから、遺構が埋没する過程で混入した後代のものであると考えられるので、今回の解析からは除外する。

### 引用文献

- 石川茂雄、1994、原色日本植物種子写真図鑑石川茂雄図鑑刊行委員会、328p.  
南木睦彦、1991、栽培植物、古墳時代の研究4 生産と流通I、石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編、雄山閣、165-174.  
中山至大・井之口希秀・南谷忠志、2000、日本植物種子図鑑東北大学出版会、642p.  
吉崎昌一、1992、古代雑穀の検出考古学ジャーナル、355、ニューサイエンス社、2-14.

第55表 大島遺跡出土種実同定結果

試料名	部位	種類名	不明物質					
			モモ	アワヒエ	コムギ	サ子類	イネ科	炭化材
			核	胚乳	胚乳	胚乳	類	
状態								
1.2 地点No.一括	K7区深堀り層	完形	1	1	-	-	-	-
3 地点No.一括	K9-10区P114層	半分	-	1	-	-	-	-
K6.5 5 K7.5 K7.5 4 K7.5 K8 K8Ⅲ K8Ⅲ 6 K10	37H炭化物 32H 6(土) 32H 7(土) 32H 8(土) 土坑1 幼生時代 1841 2740(3) かめ(土)	炭化 炭化 炭化 炭化 炭化 炭化 炭化 炭化	-	-	-	-	-	-
数字+ : 破片を含み数字以上の個体数が推定される種類を示す。								

図版 種実遺体



1. モモ核 (地点 No. 一括; K7 区深堀り層)  
 2. モモ核 (地点 No. 一括; K7 区深堀り層)  
 3. モモ核 (地点 No. 一括; K9 ~ 10 区 P114 層)  
 4. コムギ 胚乳 (K7.5; 32H 8 (土))  
 5. ムギ類 胚乳 (K7.5; 32H 6 (土))  
 6. アワヒエ 胚乳 (K10; かめ (土))

## 第 XI 章 調査のまとめ

大島遺跡の調査の結果、II b 層から中世～近世、III 層から古代、IV 層から弥生の遺物が大量に出土した。また、縄文時代晩期の土器も IV 層を主として調査区全体から広く出土した。このことから、本遺跡は縄文時代晩期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。また、各時代の包含層からは、遺物のみでなく竪穴住居跡、土坑墓、掘立柱建物跡など様々な遺構も検出された。

縄文時代の土器は、一部後期に属すると考えられるものも混じるが、大部分が晩期の黒川式土器である。石錐などの石器も含め出土量は弥生時代、古代と比べると少なく集中も見られないが、自然堤防上の微高地である本遺跡周辺に生活の基盤が形成されつつあると考えられる。

中世の遺物は、畠跡と掘立柱建物跡が隣接する K 7 区周辺の南側に位置する K 2 ～ 5 区に集中が見られる。(第 187 図) 特に K 3 区北西側に集中しているが、住居などの遺構は発掘調査時には検出されず、明らかにすることできなかった。しかし、遺物の出土分布状況から調査区外に広がる可能性が非常に高く、周辺に何らかの遺構の存在が推測されるので今後の調査に期待したい。

以下、弥生時代、古墳時代、古代の遺構・遺物について検討を行いまとめとする。

### 第 1 節 弥生時代について

本遺跡の中心となる古代と並び、数多くの充実した調査成果を提供したのが弥生時代であった。

調査開始前は、薩摩国分寺から約 1.5km しか離れておらず川内川沿いという立地から古代の遺物が大量に出土することは予測されたが、その下層から約 3,000 点の遺物が出土し、20 基以上の遺構が検出されるとは想像もしておらず、私たちの予測を大幅に超えるものであった。

ここでは、弥生時代の成果を、遺構、土器、石窓丁に分けて整理する。

#### 1 検出遺構

弥生時代の遺構と考えられるものは、竪穴住居跡 9 軒、溝状遺構 1 条、土坑・ピット 11 基、弥生土器集中区 1 基の計 22 基である。確認された遺構は、K 6 区～K 9 区に集中しており(第 60 図)、出土遺物の出土量の割合(第 56 表)から考えて、弥生時代の生活の中心がそこにあったと推測される。しかし、調査範囲は遺跡全体のごくわずかであり、第 V 章でも述べたように III 層と IV 層の判別が非常に難しく、一部古代の遺物と混在した状態での集中出土が続いたため土器集中区のように検出しきれなかった遺構もあると思われる。従って、弥生時代の中心となる地域がどのように広がるかは不明であり今後の調査成果を待ちたい。

竪穴住居跡は、16 号住居以外は向きが南北方向からやや東へ傾いており、おおむね同じ方向を向いていると言える。また、ほとんどの住居跡の規模は一辺が約 2.7 m の方形であり、検出面も標高 5.1 ～ 5.2 m ではほぼ同じであり、重なりも見られることから同一時期に建てられた可能性もあるが、出土土器の様相から大きく 2 つのグループに分けられる。(第 56 表) 第 1 グループは、15 号、19 号、27 号、30 号、35 号であり、松木箇式土器を含む弥生時代後期初頭～中頃の住居跡群である。壺では口縁部がくの字状に強く外反するもので、口縁部内側がわずかに張り出すか稜を持っており、壺では屈曲の強い広口壺や瀬戸内系の凹線文土器などが含まれる。第 2 グループは、16 号、26 号、28 号、32 号であり、中津野式土器を含む弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡群である。壺では、

屈曲の弱い字上口縁を呈し頭部の縮まりが弱く、壺ではナデ肩で卵形を呈した丸底のものなどが含まれる。特に32号住居跡は、調査区外へ広がるため一部のみの調査にもかかわらず、出土点数22点中15点がほぼ完形での出土である。また、器種も多彩で、壺12点、大甕1点、壺4点、鉢4点、蓋1点であり、弥生時代終末から古墳時代初頭へと続く中で器種が豊富になっていくことを裏付ける貴重な住居内一括資料である。

溝状造構からは、口縁部に断面三角形の刻目突帯文を持つ壺と口縁部にやや厚めの断面三角突帯を持つものが出土している。前者は高橋II式土器であり、後者は入来I式土器であると考えられる。同時期の遺物は溝状造構周辺で多く出土している。また、充実した平底の脚台も出土していることから、弥生時代前期末～中期初頭にかけての溝と言えよう。

土器集中区は掘り込みを明確に検出できなかったが、土器の出土状況や接合関係からその存在が考えられる（第30図）。出土遺物の多くは接合資料が多く、完形に近い状態の壺が多く出土している。これらは胴部上位に張りを持ち、明瞭な稜を口縁部内側に持ち強く外反するくの字口縁であることから松木蘭式土器の一群であり、後期前半～中頃の遺構であろうと考えられる。もう一方は、内側に張り出しを持ち、上面がわずかに凹む薄手の壺の口縁部が4点出土している。これらは黒髪式土器の流れを持つものである。他にわずかに底面が凹む充実した壺の底部、屈曲の強い上面の凹む大甕の口縁部、鋤先状口縁の壺も黒髪式系統の遺物である。また、須玖式系土器と思われる朱線が描かれた広口壺の口縁部も出土している。埋土状況の前後関係が不明確であり小破片も多いことから流れ込みの可能性もあるが、同一場所に弥生時代中期の遺構が存在していた可能性も否定できないであろう。

第56表 遺構別弥生土器出土状況一覧表

大島遺跡 遺構名	壺 形 土 器										壺 形 土 器										
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
15号堅穴住居跡									2											1	
16号堅穴住居跡									1	1										1	
19号堅穴住居跡						2															1
26号堅穴住居跡							2		2												1
27号堅穴住居跡							1	2													
28号堅穴住居跡								1	2												
30号堅穴住居跡				1				1									1	1			
32号堅穴住居跡									1	11											4
35号堅穴住居跡						1	2	3	1												
溝 状 遺 構	1	2																			
土 坑・ビット										1	1										
土 器 集 中 区	1			1	3	1	3	7								1	1	1			

## 2 出土土器

弥生時代の土器は、IV層を中心として一部Ⅲ層の遺物と混ざりながら多量に出土している。弥生時代前期～終末期のものまでの土器が、調査区全域から出土した（第11・12表）。出土量から見るとK6～K9区に集中しており、弥生時代前期、中期、後期、終末と分けて時期ごとに遺物量を比較すると、やや後期～終末期の値が高い。このことから、本遺跡で弥生時代後期～終末期の中心となっていたのはK6～9区周辺であると思われる。また、包含層遺物の出土分布をまとめた結果

(第60・61図)、弥生時代前期の溝状遺構周辺に前期～中期初頭の遺物が集中している。このことから、K6区周辺に遺構の存在が推測される。弥生時代中期に当たる遺物は、K6.5～7.5区に多く出土している。集中と言えるほどではないが、K6.5～7.5区付近に近隣地域に住居群の可能性が考えられる。これらの結果より、K6区周辺からK9区方面へ多少の居住域移動があったか、あるいは住居域の広がりが考えられる。このように、早くから自然堤防としての微高地が形成されたK6～9区周辺で、弥生時代を通しての生活文化圏が形成されていたと推測される。

本遺跡の出土土器を各時期ごとに分類してまとめたものが、第190図である。壺を中心に分類したが、弥生時代後期～終末期にかけては遺構内出土のものが多いのに比べて、弥生時代中期に関しては包含層出土が中心となるので他器種との前後関係が不明瞭である。したがって大まかな時期区分で掲載した。

壺の分類で見ると、弥生時代前期の断面三角形の刻目突帯を貼り付けた高橋式（Ia・Ib類）、肥厚した口縁部を持つ弥生時代中期前半の入来I式（II類）、入来II式土器（III類）が出土している。IV類は、口縁部内側に尖り気味の張り出しを持ち、上面が平坦である。これは、入来式と黒髪式両方の特徴を併せ持つものである。V類は内側の張り出しがより強くなり、上面の凹みが顕著になっていく。これは黒髪II式の特徴が良く出ているものであり、V類の中には在地のものではない丹塗りの壺も含まれている。その反面、山ノ口式の出土は二叉状口縁の土器片などわずかしか見られなかった。VI類、VII類は、強く外反し、内側の張り出しあわざかに残ることから、弥生時代後期の松木齒式の中でも黒髪式の様相が強いものであり、影響を受けたと見られる。これにより、肥後地方の影響を受け黒髪式→松木齒式へと変化していったことが裏付けられた。その後、松木齒式（VIII・IX類）、弥生時代終末期の中津野式（X類）へ続き古墳時代へと至る。

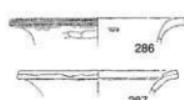
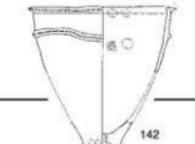
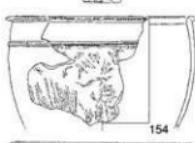
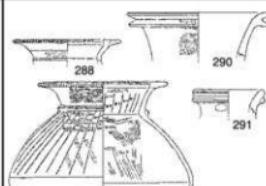
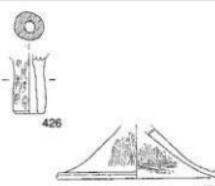
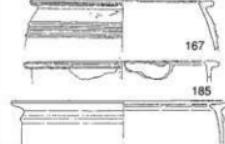
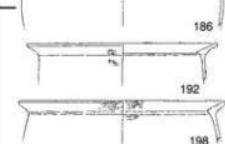
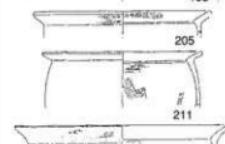
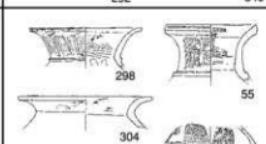
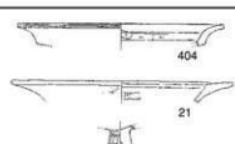
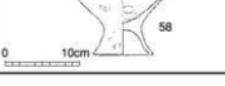
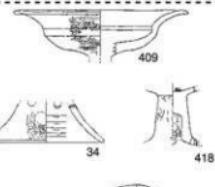
壺以外には大壺、壺、高坏、鉢、器台、蓋、小型土器、ジョッキ型土器など多彩な器種が出土した。中でも黒髪式と考えられる壺、大壺、高坏、広口壺や外面全面に丹塗りを施した土器片、免田式の長頸壺の出土により、九州西部地方との活発な交流が推察される。また、瀬戸内系の四線文土器の出土により、より広範囲な交流も想像できよう。

今回は時間的制約もあり本遺跡内の遺物の検討にとどまったが、これから薩摩半島西部地域の弥生土器編年を考えるうえで、貴重な資料である。

このように本遺跡周辺は、自然堤防が形成された縄文時代晩期頃から人々が定住し始め、古代の国府・国分寺の設置されるよりはるか以前の弥生時代に川薩地方の中心地として繁栄し、他地域と活発な交流が行われていたと考えられる。（平木場秀男）

### 3 石庵丁の光沢斑分布について

石庵丁は14点出土しており、その内5点にバッチ（水滴）状の光沢斑を確認した。光沢が観察できる石庵丁とそうでないものが存在することや、発生のメカニズム、分布図の解釈は現段階では研究史を前提とした解釈や仮説実験による考察の域を超えない。観察結果は様々な使用の段階と埋蔵環境を経た結果であり、残された痕跡には複雑な使用が起因すると考えられる。接触により形成された光沢部分が変化無く残存し観察できている部分もあるだろうし、研ぎ直しや特殊な使用、埋蔵されていた環境による影響を受けた可能性もある。以上のように現段階では使用方法の推定や対象

	甕	壺	高坏・鉢ほか
前期	 132	 286 287	
中期	 142   154	 288 290 291 289 342 340 292	 426 428
後期	 186   192   198   205   211	 298 55 304 331 323 328 310 311	 404 21 416 424 425 429 408
終末	 38   58 0 10cm	 76 5 344	 409 34 418 70

第190図 大島遺跡出土弥生土器一覧

物などに課題が残されているが、ここでは金属顕微鏡を使用して観察された結果をもとに光沢斑の分布図を作成した（第191図）。

観察は落射照明付き金属顕微鏡（Nikon ECLIPSE L150）を使用し、100～200倍の倍率で約2.5mmメッシュごとに観察しながら、光沢斑分布図を作成した。バッチ状の光沢斑は大きさや密度に違いがあるが、強弱の差を定量化できないため今回の観察では光沢斑の有無で分布図を作成している。

石庖丁は刃部が形成されていない

面を主要面とし、5点中4点は両面に刃部を形成していた。

462（頁岩）

主要面（右図）は全体的に広く光沢を確認したが、右上部と下縁の一部には確認できなかった。非主要面（左図）は上半分に光沢を確認した。全体的に下半分に削痕があり、光沢との相関を示唆するようにも見える。刃部に光沢は確認できなかった。

460（頁岩）

両面とも左側と右穿孔部の右側に光沢斑が確認された。両面とも刃部には光沢が確認できなかった。

458（頁岩）

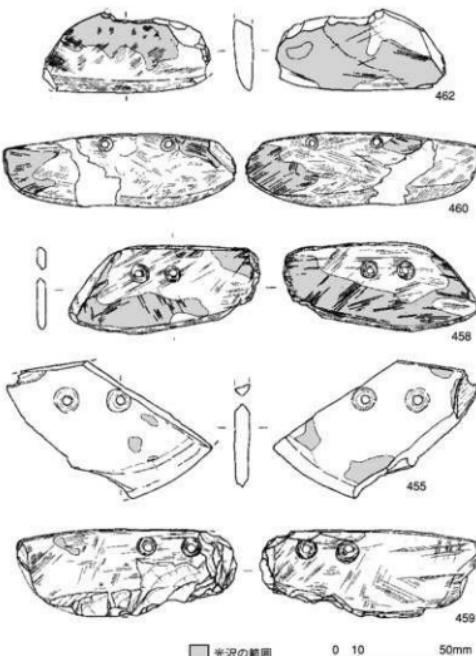
主に穿孔部周辺以外に広く光沢斑が確認された。No462、460と同じ様刃部に光沢は見られない。

455（硬質砂岩）

部分的に光沢斑が観察されたが、刃部には確認できなかった。

459（粘板岩）

両面とも部分的に光沢斑を確認した。（永瀬功治）



第191図 石庖丁光沢斑分布図

## 第2節 古墳時代について

古墳時代の遺構及び遺物は、前後の時期の弥生時代や古代と比較すると少ないものであった。しかし、土坑墓2基と完形須恵器4点がはいった土坑は特筆すべきものであった。

土坑墓1は大刀1、短刀1、短剣2、鉄鎌8本、須恵器壊身1点を副葬品として有するものであつた。大刀は6世紀後半特有の鐔をもち、また鍔本穴が施された特徴的なものであり、一方鉄鎌

は頸部に独立逆刺が片側につくという一般的には5世紀と判断される柳葉形鉄鎌であった。共伴した須恵器坏身は、受け部からの立ち上がりが短く内傾し、底部に回転ヘラケズリがみられることよりTK43の新相ないしTK209段階に位置づけられ6世紀後半頃の時期と判断される。

また、土坑墓2は2点の耳環を副葬品とするものであった。ただし他に共伴する土師器や須恵器の出土が無く、時期の特定は困難であるが耳環の存在から6世紀後半から7世紀前半と判断される。

このような土坑墓の存在は、川内市の横岡墳群において板石積石室墓とともに土坑墓も確認されており、石室墓から土坑墓への交代という重要な社会的変化とその意義については、西健一郎氏により検討・指摘されて（西 1996）いる。本遺跡の土坑墓は、これまで明確でなかった南九州薩摩地域における該期の墓制について新たな知見をもたらすものであり、今後の古墳時代研究にとって貴重な類例となろう。

土坑1からは高杯蓋2点、坏身1点、坏身1点がほぼ完形の状態で出土した。蓋はいずれも天井部と口縁部の境にシャープな稜があり、天井部全体に回転ヘラケズリが施されていた。坏身も同様であり底部に回転ヘラケズリが施され、受け部からの立ち上がりはほぼ直に近いものであった。これらの特徴から5世紀後半のものと推定される。包含層から出土した甕もこの時期のものと思われる。熊本大学の杉井健氏と鹿児島大学の橋本達也氏によると、これらの須恵器はTK23に該当すると教示を受けた。

包含層からの出土遺物で特記すべきものが、把手付きの甕である。器面にタタキ痕が残っているのが特徴であり、須恵器の手法によるものと判断される。同様の手法による把手付き甕も認められた。第111図275は大型堅穴状造構から出土したものであり、古代の造構のなかで取り扱っているが、つつぬけタイプの蒸気孔で器面には斜格子状のタタキが残り、把手付甕と同様に須恵器の技法で作られ焼成された赤燒土器である。また南九州では類例のない譚付の羽釜も出土しており、先の把手付蓋や把手付き甕と同様6世紀頃のものと杉井氏に教示を受けた。

調査区域は遺跡全体のなかでわずかにトレンチ状の少ない面積であり、周囲にはまだ多くの土坑墓や土坑などが存在している可能性が高い。

### 第3節 古代について

#### 1 住居跡について

古代の住居跡として検出されたものは総計23軒であった。ただし、遺物包含層と造構埋土が極めて類似していたことから、見逃した可能性も否定できない。また検出できた住居跡もこのように埋土の状況から、かなり下位の面で検出しており、検出面からの深さはわずかな浅いものであった。そのため住居跡出土の遺物は床面直上のものが多く、各々の住居跡の時期を反映しているといえる。

古代の住居跡は全て方形もしくは隅丸方形を呈していた。住居跡内の柱穴は残念ながら全く検出できなかった。

これまで県内で検出されている奈良～平安時代の住居跡は、熊本県以北で検出されるものと異なり、造りつけのカマドがないのが普通である。

しかし、今回の調査で県内では初めてカマド付きの住居跡が2軒検出された。カマドはいずれも

通常の平均的な構築方法である黄褐色粘土を使用して構築したものである。このようなカマド付き住居跡の存在は、南九州ではこれまで類例がないことより、この集落が鹿児島の在地的なものではなく、例えば後述する肥後から来た集団などのように他地域から移住してきた人々の存在を考慮する必要がでてくる。カマドをもつ住居跡は8号住居跡と33号住居跡であり、33号住居跡の遺物はほとんど少なく時期を特定できないが、8号住居跡の出土遺物は高台付壺や蓋など8世紀代のものであり、これらは奈良時代に位置づけられよう。ただし、全ての住居跡がカマド付きではなく、わずか2軒のみ（今回の検出結果）であることからこの集落を形成した集団の構成や集落の性格が伺える可能性がある。しかし、遺跡全体の調査ではないため集落全体の割合は不明なことより慎重な扱いが必要とされる。

ところで、住居跡が検出されたのはK6～8とK9～10の区域及びK15であり、K11からK14までの区域で住居跡は検出されず、そのかわりに多数の土坑群と溝状遺構が検出されている。この区域に所在する土坑群については、その性格を全てについて断定し得なかったが、一部のものについては形態的に墓の可能性も想定される。また、時期は異なるものの刀や剣を副葬した古墳時代の土坑墓がその区域の中間に位置するK13で検出されており、その時期から古代まで墓域として区別されていた可能性も考える必要があろう。

## 2 遺構と出土遺物

土師器を中心とする出土遺物は、遺物包含層から多量に出土したのみでなく、住居跡などの遺構から一括りの高い遺物の出土がみられた。このような遺構からの出土遺物群については、土師器壺・壺・甕などの口径・底径・器高など法量や器形などの形態から時期的な変遷がうかがえる。

坪の時期的な変遷についてはこれまでの研究により、口径の大きなものから小さいものへの変化や、体部が直線的なものから内湾あるいは丸みをもつものへ、また底径は大きく側面観が箱形を呈するものから底径が小さくなるもの等の変化が知られている。（山本1988.1990.1997 森田1977 横田・森田1976）

鹿児島県内出土の土師器については中村和美により、遺構一括出土例を中心として、また火山灰の利用と広域流通品との共伴などから編年が提示されている（中村 1994・1997）。しかし、これまで8世紀代の資料が乏しい現状であった。

今回、大島遺跡から出土した土師器壺については法量及び形態から11類に区分した。1類は底面が手持ちヘラケズリ、2類は体部全体の調整がヘラミガキ、3類は高台付壺と技術や形態等が異なる。7類は特殊な器形である。そして4類から5類、6類、8類、9類としだいに口径が小さくなり、同様に底径も小さくなる。また10類は円板状高台を有するもので、11類は充実高台と呼ばれるものである。円板状高台と充実高台を有するものは一般的に壺として区分されるが、ここでは輪高台をもたないものとして壺で取り扱っている。

また壺については4類に区分し、皿や高台付皿についても数類に区分できた。

遺構出土土師器を概観すると、第192図のように13号住居跡出土のものは底部に手持ちヘラケズリを施した1類壺が主体である。このような須恵器の製作技法による壺の類例の出土はこれまで県内では認められず、また8世紀以降の形態ではないことより、7世紀末の可能性がある。

11号住居跡の壺は口径及び底径とも大きい高台付壺であり、須恵器の高台付壺を模した形態であり8世紀に比定されよう。

3号住居跡の土師器壺は口径と底径が大きい壺5類が主体であり9世紀代が考えられる。

10号住居跡と6号住居跡は口径・底径が大きい壺5類と底径が比較的小さくなる壺6類からなり、共伴する壺は体部が直線的な深いものと内部が内湾して口径が比較的大きいものがある。このような壺と壺の組み合わせから9世紀後半に位置づけられる。

土師器集積土坑については、10類とした円板状高台と11類とした充実高台がみられ、また輪高台の壺は体部が丸みをもち、高台は「ハ」の字状に開くものである。このような壺と壺の共伴例は市ノ原遺跡に認められるものあり、9世紀末から10世紀初頭の時期に位置づけられる。

5号住居跡では9類の壺とした口径の小さいものが主体であり、同様の小さい口径の内黒土師器壺が共伴している。また口径が同じ程度の輪高台の皿と充実高台の皿も共伴している。このような口径が小さく体部が内湾する壺と内黒土師器は、鍛冶屋馬場遺跡遣構一括資料でも認められるものと共通しており、10世紀後半に位置づけられよう。

また、出土した須恵器については8世紀代の高台付壺などが多く出土したことが特徴といえる。さらに県内では出土例の少ない7世紀末の特徴的な小さなかえしを有する壺蓋も認められた。

県内における須恵器窯には、本遺跡に近い位置に8世紀代前半の鶴峯窯が所在している。出土した高台付壺には鶴峯窯出土と類似するものも認められた。この高台形態などの特徴は「萩尾型」にも近いと思われる。網田龍生氏は宇城の須恵器工人との関連を指摘している。また出土した須恵器には肥後の荒尾窯に類似するものも多く認められているが、それは県内の中岳山麓窯跡群のものとも特徴が類似するため判別は困難である。今後胎土分析などが必要である。

このように検出された住居跡などの遺構は、その中から出土した一括性の高い遺物より、7世紀末から10世紀後半に至る時期のものであり、集落はかなり長い期間にわたり形成されたものであると判断される。また出土遺物において、これまで県内で出土例の少ない7世紀末や8世紀代の一括資料が多く認められたことは、今後の南九州の古代研究にとって大きな成果と言える。

今回調査された部分は遺跡全体から見るとかなり狭い面積であったが、それでも遺跡が長期間にわたり集落が形成されていたことが理解されよう。

### 3 異色高台壺について

出土した土師器壺のなかで高台部分のみ色調が異なる特徴的な土師器が認められた。これは体部とは異なる粘土を高台部分に使用することにより、焼成後に発色が違う独特な効果を狙ったものであろう。ただし、高台の色を変えた壺が通常の壺と機能や目的が異なるとは思われない。

本遺跡での出土例では赤褐色の高台（赤高台）と白色の高台（白高台）そして中間的な黄白色の高台（桃高台）という大きく三種類の異色高台壺が確認できた。赤高台については焼成により赤褐色を発色することより、鉄分の多い粘土を別に用意して高台部分を作成した可能性も考えられる。

第87図95と96は6号住居跡から出土した内黒壺の赤高台と白高台であり、共伴して出土した。いずれも底部近くのみであるが、住居跡出土の多くの壺・壺などからこの住居跡は9世紀後半に位置づけられるものであり、その時期これらの異色高台は同時存在していたことになる。

また包含層からは赤高台や白高台のみでなく、赤色と白色の中間色である桃色の異色高台壺も認

5号住居				
34号住居				
土師集積土坑				
6号住居				
10号住居				
3号住居				
11号住居				
13号住居				

第192図 古代遺構出土一括資料 (S=1/4)

められている。この桃高台塊は、これまで異色高台塊として知られている内黒土器ではなく、また高台の形態も各々大きく異なる。

このような異色高台塊については、近年調査報告がなされた川内市計志加里遺跡、加治木町高井田遺跡、姶良町小倉畠遺跡などで赤高台塊が相次いで認められたことにより、一部の注目を受けている。

赤高台塊については、上記の各遺跡などでわずか数点の極めて少ない出土であったが、菱刈町内の最近調査された大峰遺跡で95のような資料が多数出土している事例が発見された。ここでは内黒の赤高台塊のみの出土であり、他の白高台や桃高台などの異色高台塊は認められていない。このことより赤高台については、現在の菱刈町内の遺跡付近を中心とする当時の集団により作られた可能性が高いと思われる。しかし、643の赤高台は色調が橙色であり、高台の形状も異なることから別の生産地のものと思われる。また白高台や桃高台などの異色高台塊についても、薩摩もしくは大隅の別の集落により製作され、大島遺跡に運ばれた可能性が高い。この赤高台が多くの遺跡で出土している事実は、律令期にあっても各地で規格化されたものだけが生産されるのではなく、各々の集落において個性的な高台の塊が作られた状況が確認でき重要である。同時に、当時の人々の動きや物流を示すものとして貴重である。9世紀後半において塩・魚貝類など海浜の集落から山間部の集落への物流が存在していたと思われるが、それに対応するように、多くの逆の物流も推察される。すなわち異色高台塊は当時各集落から人や物の動きが存在することを実証する意味で貴重なものと評価できる。本遺跡で異色高台のうち赤高台や白高台そして桃高台など多様なものが出土したことは、大島遺跡が各地の集落から物流や人々の往来など当時多く、各地の集落から集中する性格であったことを裏付けるものと言える。

#### 4 特殊遺物からみた大島遺跡古代の性格

本遺跡では通常の一般的な遺跡では出土数が極めて少ない越州窯系青磁や緑釉陶器が大量に出土した。緑釉陶器は合計23点出土しており、京都系、長門系、近江系のものが認められ、そのうち半数は京都系であった。また器種には塊・皿・盤のみでなく、三足盤・壺・合子など多彩であった。越州窯系青磁も計86点とかなり多く出土し、碗が主体であり他に杯・皿・壺なども認められた。それのみでなく、本県での初出土となった帶金具の石帯も2点出土した。いずれも丸柄であり、裏面には3ヶ所の潜り穴が認められるものであった。

さらに希少なものとして、風字二面鏡があげられる。風字鏡はこれまで県内においては薩摩国府跡で破片が1点と、高山町波見遺跡から1点出土しており、また吹上町永吉では土師質の風字鏡が出土している。

また関連するものとして、8世紀代の高台付壺や壺蓋・壺などを使用した多数の転用鏡と須恵器の水差しも出土した。1遺跡のわずかな調査面積に対して88点の転用鏡の出土は驚くばかりである。これらの遺物は県内的一般の遺跡ではほとんど出土しないか、あるいは極めて出土数の少ない特殊なものであり、本遺跡の性格を考えるうえで重要である。

大島遺跡は薩摩国府・国分寺とも距離的に近く、また上記したような特殊な遺物が多く認められることから、薩摩国府や国分寺と関連の深い人々が居住した集落であると位置づけられる。

ただし、本遺跡の集落の形成はすでに弥生時代終末から認められており、その後には古墳時代後

半の6世紀後半の各種の遺物や墓も存在し、集落は継続していたと思われる。さらにこの時期の九州には類例が少ない鐸付き羽釜の出土は畿内地域との関係を考えるうえで示唆的である。つまり本遺跡において古代集落の形成は、弥生時代終末から古墳時代集落の延長線上にある。大島遺跡は古代において高城郡に属しており、ここに国府が置かれる要因の一つは地理的なものだけではない可能性も考えられる。

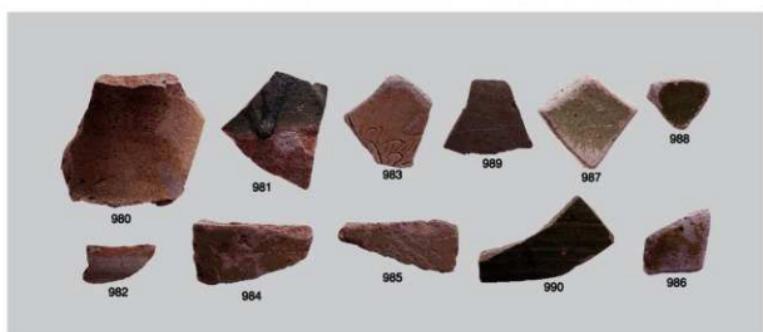
いずれにしても、大島遺跡は特殊遺物の多様性から単なる集落のみでなく、国府・国分寺と関連する官衙施設の存在も予想され、残存部の保存と重要な遺跡として今後の確認調査が望まれる。

蛇足ではあるが文献史学の研究では、「和名類聚抄」から高城郡6郷のうち合志、飽田、宇土、託万の4郷は肥後郡名に一致していることから、中村明蔵氏や永山修一氏により肥後から移民が移住させられたと考えられている。本遺跡で検出された県内では珍しい古代のカマド付住居跡の存在は、それを裏付ける一つの考古資料と言えよう。（宮田栄二）

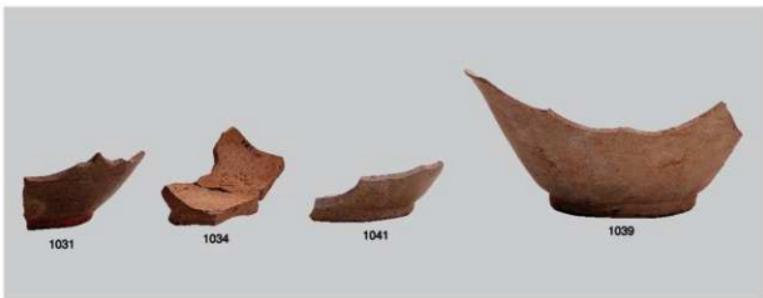
## 参考文献

- 網田龍生 1994 「肥後における回転台土器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X  
網田龍生 2001 「九州における須恵器の製作技法とその転換」『古代の土器研究会第6回シンポジウム発表要旨』  
網田龍生 2003 「古代荒尾産須恵器と字城産須恵器」『考古学研究室創設30周年記念論文集 先史学・考古学論究』IV  
池田泰史 1996 「II 南九州（熊本、宮崎、鹿児島、沖縄）」『須恵器集成図録』5 雄山閣出版  
池畠耕一 1978 「隼人の漁撈生活」『隼人文化』5  
稻田孝司 1978 「忌の龜と王權」『考古学研究』25-1  
白杵 繁 1984 「纏木孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』31-2  
宇土市教育委員会 2001 「考古－石ノ瀬遺跡－」新宇土市史基礎資料（9）  
岡本武志 1991 「日向における古代末の土器－宮崎学園都市遺跡群を中心として－」『中近世土器の基礎研究』VII  
鹿児島県教育委員会 1983 「成岡遺跡・西ノ平・上ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)  
鹿児島県教育委員会 1985 「外川江遺跡・横岡古墳」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)  
鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 「楠元・城下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター (57)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 「鍛冶屋馬場遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター (39)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 「前川遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター (56)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 「高井田遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター (35)  
鹿児島市教育委員会 1996 「北籠遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)  
鹿児島市教育委員会 2000 「不動寺遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(25)  
清田純一 1991 「肥後における弥生時代遺跡の一様相」『交流の考古学 肥後考古』8  
草原孝典 2003 「岡山県下における綠釉陶器共伴の土器様相」『中近世土器の基礎研究』XIII  
熊本県教育委員会 1980 「生産遺跡基本調査報告書II」熊本県文化財報告 (48)  
熊本県教育委員会 1983 「梅ノ木遺跡」熊本県文化財報告 (62)  
熊本県教育委員会 1986 「神水遺跡II」熊本県文化財報告 (82)  
五島美術館（編） 1998 「日本の三彩と緑釉」  
古代の土器研究会 2003 「古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－」  
齊藤孝正 2000 「日本の美術」409 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器  
佐藤浩司 2003 「西国における墨書き土器の様相－北部九州を中心として－」『古代官衙・集落と墨書き土器－墨書き土器の機能と性格をめぐって－』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所  
杉井 健 1999 「瓶形土器の地域性」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』  
杉井 健 2003 「朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究」平成12~14年度科学的研究費補助金（基盤研究C2）研究成果報告書

- 角田文衛（編） 1986 「新修国分寺の研究 第5巻下 西海道」 吉川弘文館
- 全国大学博物館学講座協議会西日本部会（編） 2002 「博物館実習マニュアル」 美容書房出版
- 太宰府市教育委員会（編） 2000 「太宰府条坊跡」 XV
- 太宰府市史編集委員会（編） 1992 「太宰府市史」 考古資料編
- 鶴淳一郎 1985 「日本の美術」 233 陶磁（原始・古代編）
- 坪根伸也 1991 「南九州における櫛描文の系譜」・「交流の考古学 肥後考古」 8
- 中世土器研究会（編） 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」
- 東郷町教育委員会 1986 「五社遺跡」 東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 1
- 内藤政恒 1967 「観の需要と二面鏡に関する研究序説」『日本考古学選集』 25
- 中島恒次郎・城戸康利 1994 「薩摩國から来た食器－太宰府条坊跡第89次調査出土資料－」『中近世土器の基礎研究』 X
- 中園 聰 1996 「弥生時代中期土器様式の併行関係」『史潤』 133
- 中園 聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』 9
- 中園 聰 1998 「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格－東アジアの中の須玖II式土器－」『人類史研究』 10
- 中園 聰 2004 「九州弥生文化の特質」
- 中村和美 1994 「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器－土器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』 X
- 中村和美 1997 「鹿児島における古代の在地土器」『鹿児島考古』 31
- 中村耕治 1986 「弥生時代－櫛描文土器・瀬戸内系土器のありかたと時期について－」『鹿児島考古』 20
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿児島考古』 6
- 中村直子 1988 「免田式土器考」『人類史研究』 7
- 中村直子 1991 「南九州地域における弥生土器の編年研究に関する問題」『南九州地域における原始・古代研究の諸様相に関する総合的研究』
- 中村直子 1993 「中津野式に表れる地域色」『鹿児島考古』 27
- 中村直子 1999 「鹿児島県出土の高杯の分類」『大河』 7
- 永山修一 2002 「鹿児島県の平安時代研究について」『隼人文化研究会・蝦夷研究会合同例会発表要旨』
- 柄崎彰一 1976 「三彩・縁袖」日本のやきもの 1
- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983 「埋蔵文化財ニュース」 41
- 西 健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』 12
- 西 健一郎 1996 「川内市における古墳時代墳墓について」『大河』 6号
- 西谷 正 1997 「九州出土の跨蹄・石帶地名表」『人類史研究』 9
- 谷頭遺跡調査団・西原村教育委員会 1978 「谷頭遺跡調査報告」
- 林 麻穂 1998 「免田式土器の編年と性格に関する再検討」『人類史研究』 10
- 藤尾慎一郎 1993 「南九州の突变土器」『鹿児島考古』 27
- 本田道輝 1982 「松木瀬遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』 14
- 本田道輝 1984 「松木瀬1号住居址出土土器とその意義」『鹿児島考古』 32
- 本田道輝 1993 「鹿児島県下の弥生後期土器」『鹿児島考古』 27
- 本田道輝 1999 「松木瀬O式土器、その後」『鹿児島考古』 33
- 三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館 1990 「第9回三重県埋蔵文化財展 縁袖陶器の流れ」
- 美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土器について」『中近世土器の基礎研究』 X
- 免田町教育委員会 1996 「本目遺跡・免田町文化財調査報告 2
- 村上 隆 2002 「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」『奈文研紀要』
- 八代市教育委員会 1988 「下轟切遺跡 I」 八代市文化財調査報告 3
- 山本信夫 1988 「太宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料－」『中近世土器の基礎研究』 IV
- 山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』 71
- 横田賢次郎 1983 「福岡県出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館研究論集』 9
- 横田賢次郎・森田勉 1976 「太宰府出土の土器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』 2
- 和田晴吾 1979 「1土鍤・石鍤」『弥生文化の研究』 5



カラー  
図版2



越州窯系青磁 1

カラー  
図版3



越州窯系青磁 2

図版1



調査風景  
(K6~8調査区)

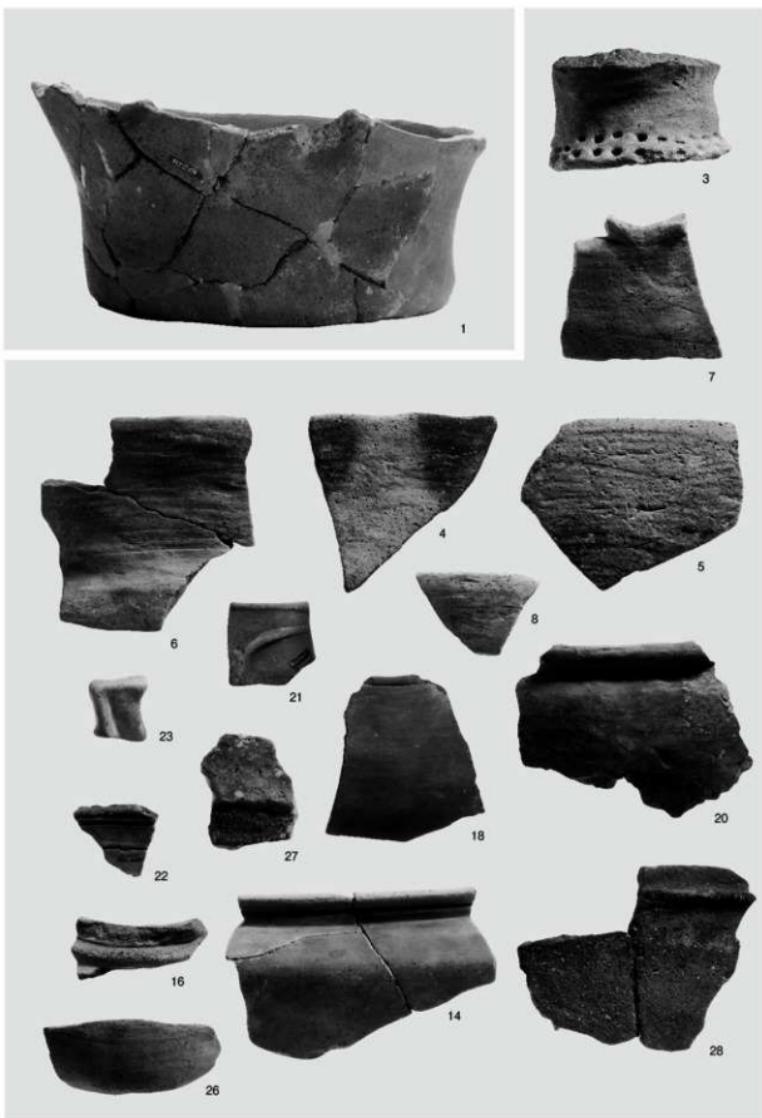


調査風景  
(K9~10調査区)



土層  
(K6~8調査区)

図版2



縄文時代の土器

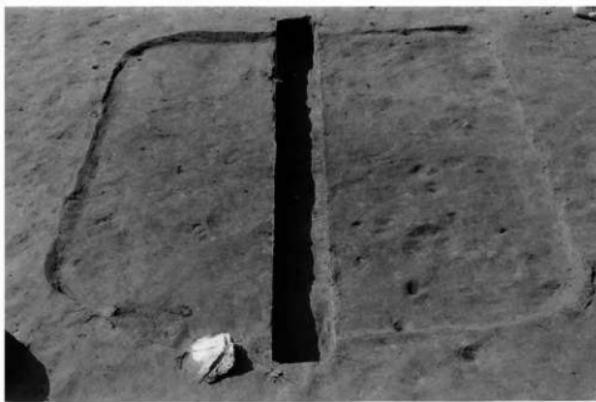
図版3



弥生時代  
15・16号竪穴住居跡  
検出状況



弥生時代  
16号竪穴住居跡  
遺物出土状況



弥生時代  
19号竪穴住居跡  
完掘状況

図版4



弥生時代  
26号竪穴住居跡  
遺物出土状況

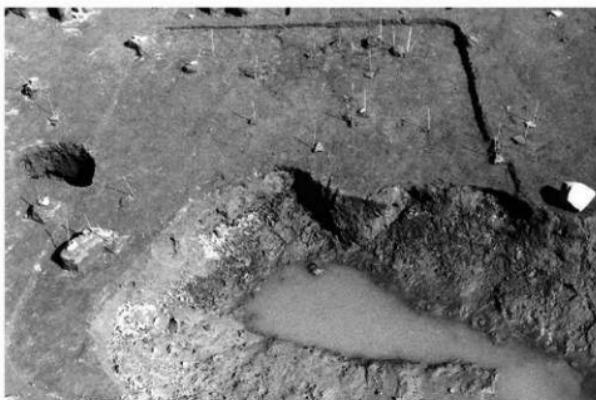


弥生時代  
27号竪穴住居跡  
完掘状況



弥生時代  
28号竪穴住居跡  
遺物出土状況

図版5



弥生時代  
30号竪穴住居跡  
遺物出土状況



弥生時代  
32号竪穴住居跡  
遺物出土状況



弥生時代  
32号竪穴住居跡  
完成状況

図版6



弥生時代  
35号竪穴住居跡  
遺物出土状況1



弥生時代  
35号竪穴住居跡  
遺物出土状況2



弥生土器集中区  
遺物出土状況1

図版7



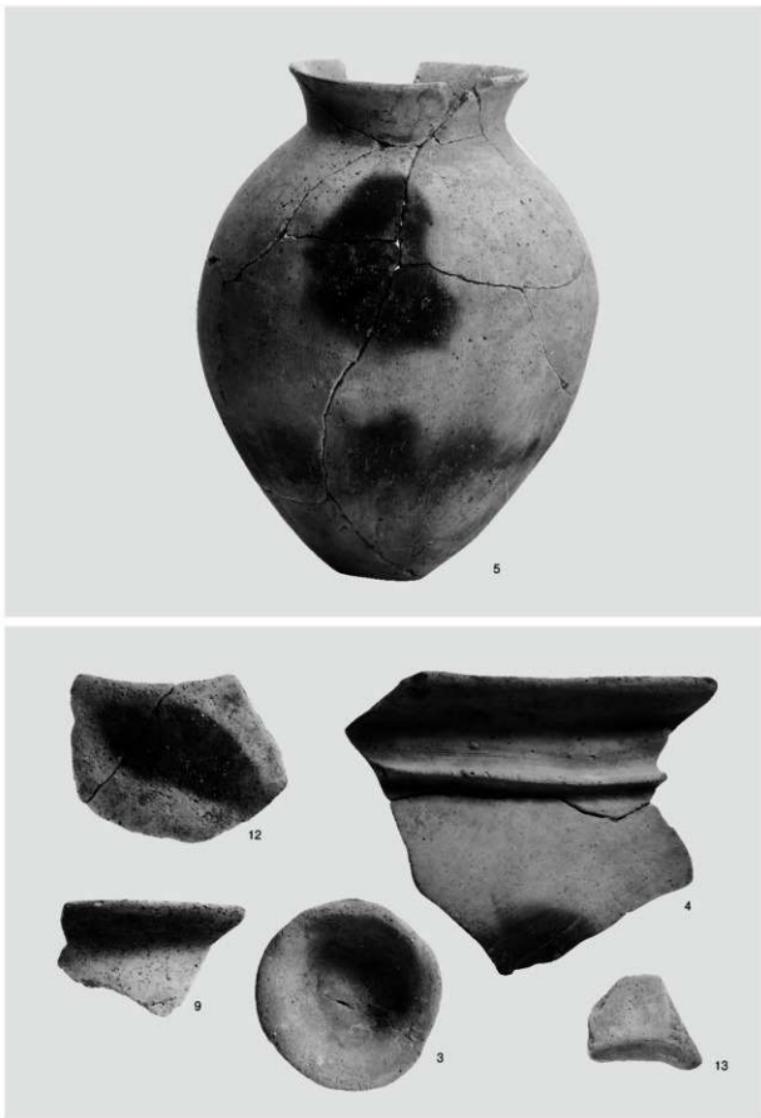
弥生土器集中区  
遺物出土状況2



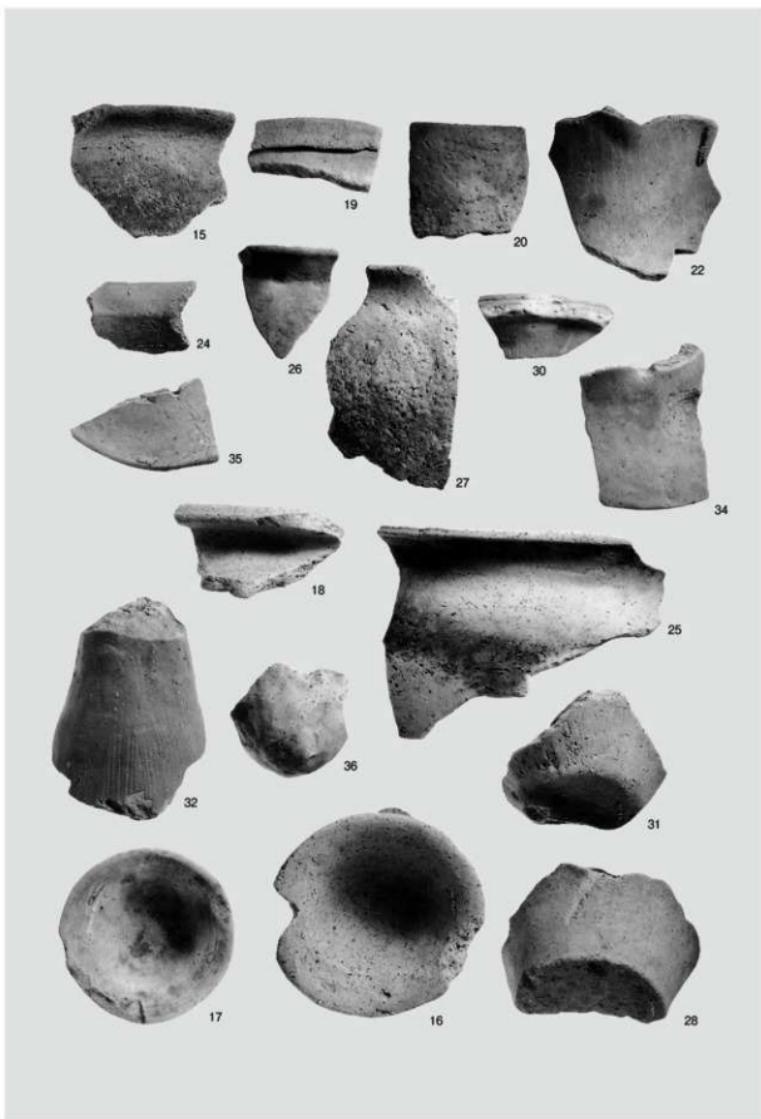
弥生土器（壹）  
出土状況



石庵丁出土状況

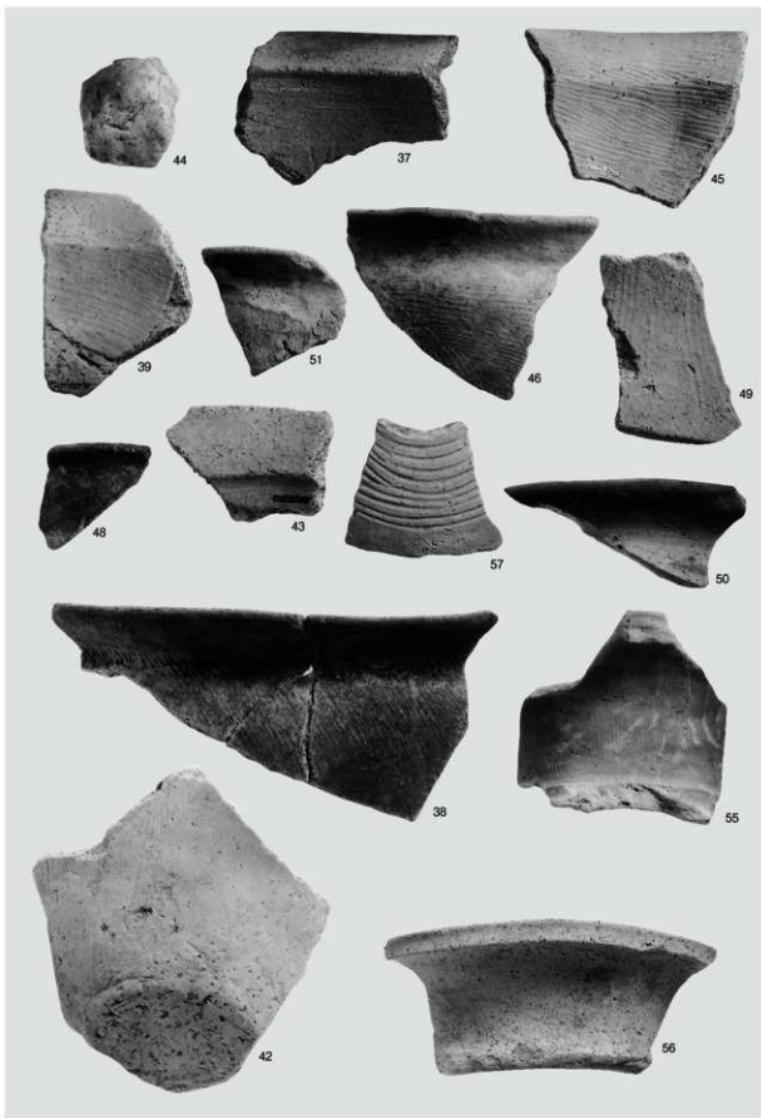


弥生時代の土器1 (15・16号住居跡)



弥生時代の土器2 (19・26号住居跡)

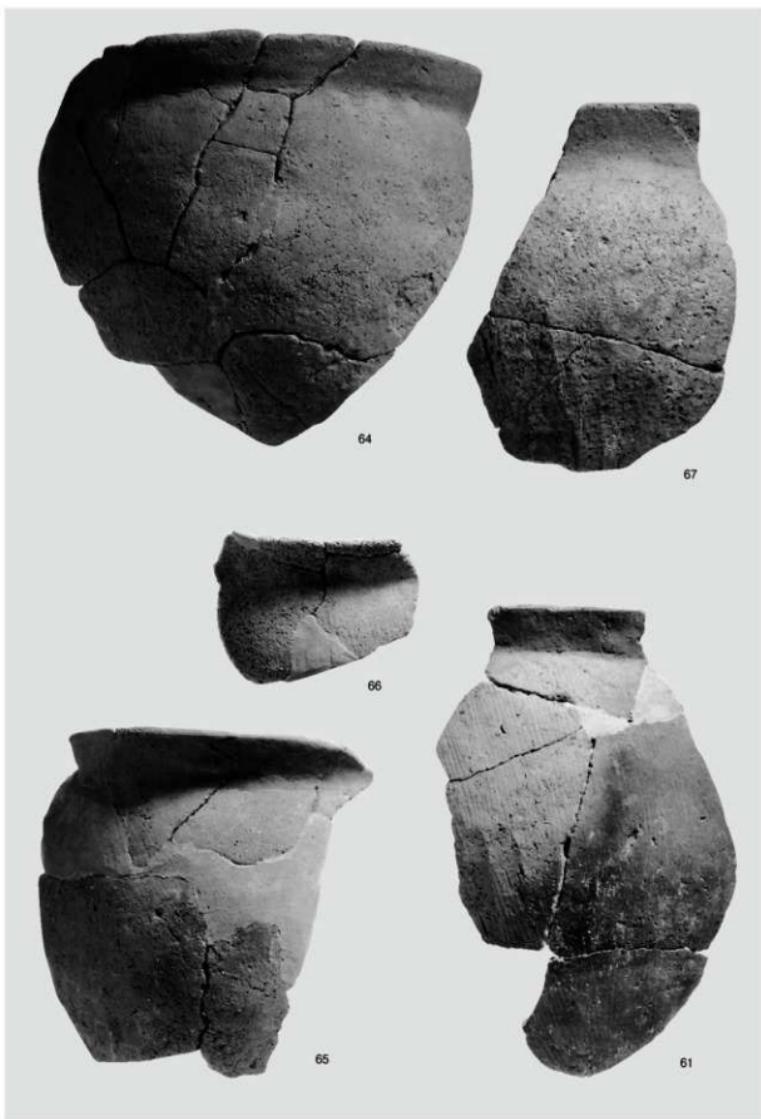
図版10



弥生時代の土器3 (27・28・30号住居跡)

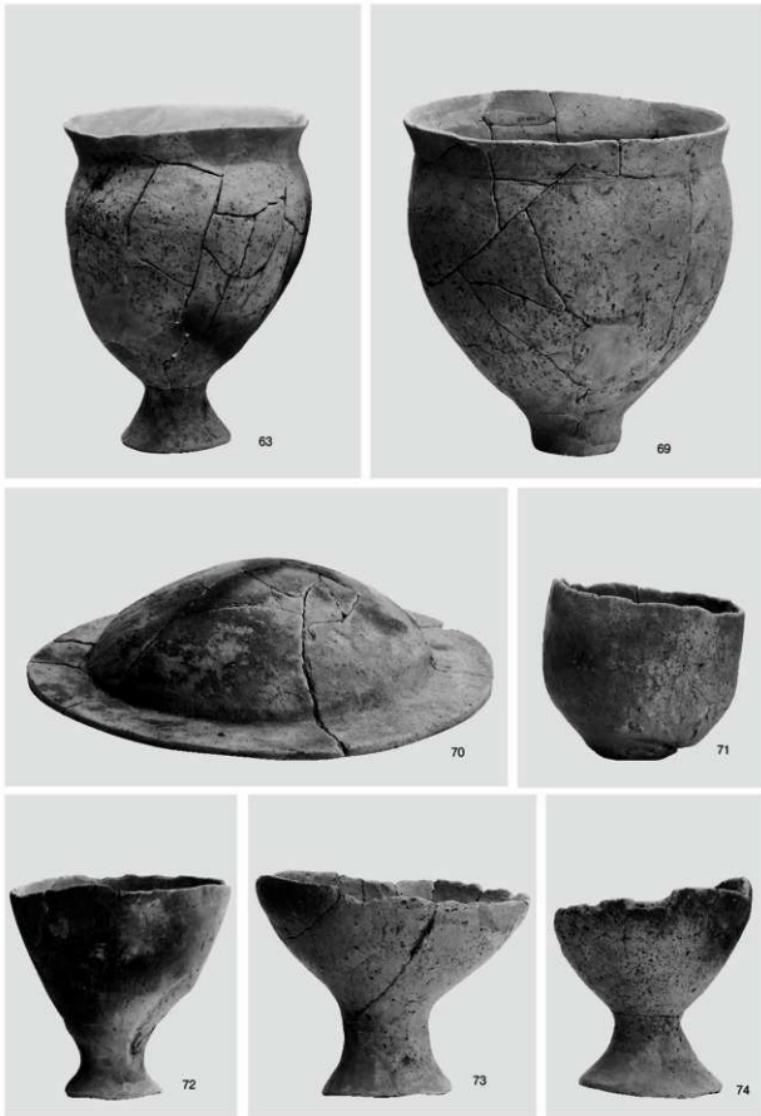


弥生時代の土器4 (32号住居跡①)



弥生時代の土器5 (32号住居跡②)

図版13



弥生時代の土器6 (32号住居跡③)



75

弥生時代の土器7 (32号住居跡④)